印の オタスケパソコン DOS版



これでやっと使えるぞ!!

DOS

CONFIG.SYS & AUTOEXEC.BAT

コンフィグシス & オートエグゼクバット



メモリが足らなかったら CONFIG.SYSをこうする

アプリケーションが行方不明になったら AUTOEXEC.BATをこうする

日本語FEPを切り替えて使うには CONFIG.SYSをこうする

本谷裕二 著

本書を読めば、パソコンはあなたの意のままです。

新しいソフトをインストールするたびに
行方不明

「メモリが足りません」といわれる

日本語FEP が使いわけられない

いくつもの
アプリケーション・ソフトを使いわけられない

原因は
CONFIG.SYSと
AUTOEXEC.BATを
知らなかったからですよ……………………

定価 980円
(本体951円)

オーエス出版社

これでやっと使えるぞ!!

ここが重要！



パチ！パチ！丸写し



オタスケ情報



ここを入力！



作業時間



OTASUKE INDEX

CONFIG.SYS で使用するコマンドとドライバ

AUTOEXEC.BAT で使用するコマンド

オタスケ インデックス

アプリケーションソフト別 AUTOEXEC.BAT&CONFIG.SYS

印のオタスケパソコン DOS版



これでやっと使えるぞ!!

DOS

CONFIG.SYS & AUTOEXEC.BAT

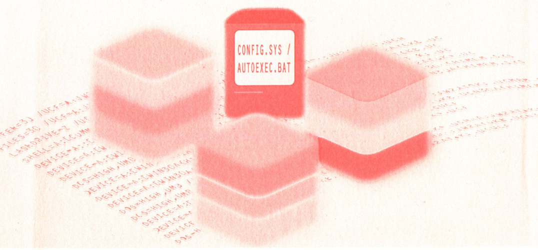
コンフィグシス & オートエグゼクバット

メモリが足らなかったら CONFIG.SYSをこうする

日本語FEPを切り替えて使うには CONFIG.SYSをこうする

アプリケーションが行方不明になったら AUTOEXEC.BATをこうする

本谷裕二 著



オーエス出版社

パソコンがある日
突然動かなくなってしまったこと
ありませんか？

新しいソフトを買ってきてハードディスクへ
インストールしたら
きのうまで使っていたハードディスクのなかの
ワープロが
どっかに消えちゃったよ～
だれか知りませんか

難しいマニュアルをなんとか読んで
せっかくインストールしたのに
メモリ不足で動かない！？
いやんになっちゃう

どうしてみんなのハードディスクには
そんなにアプリケーションソフトがいっぱい
入っているの？
わたしなんか
340 メガもあるハードディスクなのに
入っているのはワープロ 1 個だけ
いったいどうすればいいの？

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS を
書きなおせばなおるらしいよ…

こうすればいいんです！

パソコンは未完成品！？
だからどう動いていいか、指示書が必要なんです

みなさん、どうですか。前ページに紹介した悩みごとをなんども経験していませんか。あんな嫌なこと、いっぱい経験積んだって、なんにもいいことなんかないですよね。それどころかトラブルが起きるごとに友人に電話をかけて、直し方をきいたり、頭を下げては動くように直しにきてもらったりと、苦労しますよね。

なんであんなに高い機械なのに、ボタンひとつで動いてくれないのだろう、なんて思いませんか。

そうなんです。パソコンは電源をオンしたところで、簡単には動きません。動くようになにか設定してあげないといけないのです。そこいくと、ワープロ専用機は電源を入れるとすぐに文書が打ち込めますし、メニューで選択すると表計算や住所管理といくつかのソフトも扱うことができます。

しかし、パソコンとなるとまったく話が違って、電源を入れたところでなんにもしてくれません。なぜでしょうか。

それはパソコンが欠陥商品だからです。いい方がきついですね。では、未完成品とでもいっておきましょうか。それも永遠の未完成品。

ワープロのように、完全に完成された形で出荷されているのではないのです。だから、簡単には動かないんです。手がかかるんです。しかし、手のかけようによっては想像以上にパワーを発揮してくれるのです。

未完成品のパソコンを完成品に近づけるのは ユーザーに委ねられている

こんな珍しい商品は、パソコンぐらいなものです。

この未完成品のパソコンは、当然完成品のワープロ専用機とは違った動かし方になります。ワープロ専用機のソフトは御存じのように永遠に取り替えることはできません。しかしパソコンは、ソフトはバージョンアップはできるし、メモリも増設できます。しかもCPUのチップまで変更可能なのです。

こんなパソコンを動かすには、ちゃんとした指示書が必要なのです。

その指示書のなかには、

「ひとつこれでよろしくお願いしますヨ！」

というような内容を書いておきます。

このように未完成品のパソコンなので、オーナーであるユーザーがどうパソコンを動かすか、リードしてあげないといけないんです。

パソコンへの指示書
↓
CONFIG.SYS & AUTOEXEC.BAT

この2つのCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATのファイルの扱い方さえおさえると、もうパソコンはあなたの意のままになってくれるのです。

作成するのは、そんなに難しいファイルではありません。それぞれ3行から10行ぐらいのものです。こんな短い指示書でパソコンを自由に動かせるのですから、一汗流しても損は決してありません。

こんな短いCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATのファイルを理解するだけで、あの突然動かなくなるわがままパソコンから解放されるのです。しかも、パソコンが段々あなたになついてくるのです。どおしてもっと早く、このCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATの存在に気がつかなかったのかと悔やまれるくらい、すばらしいパソコンの世界があなたを待っているのです。

■CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATのごりやく

CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATの設定の方法を修得すると、つぎのことが可能となります。ほんの一部ですが、ご覧ください。

1. パソコンにアプリケーションソフトをインストールしたあと、行方不明になってしまう先住アプリケーションソフトの復旧
2. メモリを自分の環境に設定しなおすことが可能
3. ハードディスクで、日本語FEPを数種類切り替えて利用が可能
4. 多くのアプリケーションソフトをメニューで運用することが可能
5. 自在にフリーソフトウェアを組み込むことが可能
6. ワープロソフトから解放されて、エディタによる一歩進んだパソコン利用が可能
7. 好きなアプリケーションソフトを、パソコンの立ちあげとともに起動させることが可能
8. ワープロソフトから日本語FEPを切り離し、ほかのアプリケーションソフトに組み込むことが可能

細かく学習する時間のない方のために、丸写しするだけでもトラブッていたパソコンを生き返らせることができるよう、AUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSを豊富に用意しました。おおいに参考にしてください。

なお、本書を書くにあたって、近藤光彦氏の協力を得たことに感謝しています。

本書の見方

[↵]	リターンキーの入力
↵	プログラム作成時、改行（[↵]）入力箇所
␣	スペースキーで空きを入力
[CTRL]+[XFER]	[CTRL]キーを押しながら[XFER]キーを押します
	重要な部分を表しています
	丸写しする部分を表しています
	オタスケ情報を表しています
	入力が必要な部分を表しています
	作業時間を表しています

●なお、プログラム部分は半角で入力してください。
本書は MS－DOS Ver.5.0 A をベースに記述してありますが、MS－DOS Ver.3.3 x でも一部を除いて使用可能です。
ハードは、PC－9801 VX／RX／RA／、PC－9821 Ae 上で操作確認ずみです。

CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATの基礎知識 PART 1

CONFIG.SYSの書き方 PART 2

AUTOEXEC.BATの書き方 PART 3

PART 4 実践 AUTOEXEC.BAT&CONFIG.SYS

PART 1

CONFIG.SYSと AUTOEXEC.BATの 基礎知識

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS ってなに？

Windows は 3.6 MB 以上メモリがないと起動しません。実際、Windows を快適に使うには、8 MB 以上は必要です →



最近のパソコン環境は、Windows のようにひとつの環境下でいくつものアプリケーションソフトが同時に使えるのが普通になってきています。ところが、MS−DOS 版のアプリケーションソフトはそれぞれが独立していて、起動のための環境設定が違うため、別のアプリケーションソフトと共存できるような方法が用意されていません。これではアプリケーションソフトを切り替えるたびにパソコンをリセットしなくてはいけなくなり、使いにくいことこの上ありません。

そこで、パソコンをリセットすることなくアプリケーションソフトを使い分けられる環境を設定して、快適にパソコンを使えるようにしようというのが本書の目的です。

そのために避けて通れないのが、AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の設定です。

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の 2 つのファイルは、アプリケーションソフトをパソコンで使うための環境の初期設定ファイルなのです。ですから、この 2 つのファイルの設定の仕方が分かれば、パソコンとの連絡がスムーズにでき、快適にパソコンを使うことができるのです。

CONFIG.SYS の設定をしっかり作らないと、アプリケーションソフトが立ちあがらないか、場合によっては MS−DOS のシステムすら立ちあがらないことがあります →

CONFIG.SYS ファイルは、おもにメモリ環境設定とデバイスドライバの組み込みを「こういうふうに使うからよろしくたのむネ」と書いておくファイルなのです。AUTOEXEC.BAT ファイルは、読んで字のごとく自動(AUTOMATICALLY)実行(EXECUTE)のファイルで、「書いてあるとおりに設定内容を実行してネ」というバッチファイルなのです。

MS−DOS は、MS−DOS のシステムが立ちあがると AUTOEXEC.BAT ファイルを最初に読みにいくように設定されていますので、システム立ちあげ後に実行したいことをこのファイルに書いておけば、自動的に実行してくれます。ですから、バッチファイルのなかでも特殊な位置づけがされているわけです。

ハードディスクがあまり普及していなかったころは、ひとつのアプリケーションソフトは 1 枚のフロッピーディスクに、ソフトを変えるときはフロッピーを入れ替えてリセットするのが

あたりまえだったので、AUTOEXEC.BAT は個々のアプリケーションソフト専用の起動用バッチファイルになっていました。

その名残でハードディスクにアプリケーションソフトをインストールすると、AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS を自分専用に勝手に書き替えるという荒技がまかりとおっていたのです。いまだにそのようなアプリケーションソフトが多く、新しいアプリケーションソフトを買うたびに、以前のアプリケーションソフトが立ちあげられなくなるので、ユーザーは頭を悩ますことになっているのです。こまっちゃいますね。

←本書を読むとこの問題からようやく解放さるるようになります

最近では勝手に書き替えることは少なくなったのですが、そのかわりにユーザーがなんらかの設定をしないと、新しくインストールしたアプリケーションソフトは立ちあげることもできないようになってきました。ハードディスクが普及したいまでは、メニューなどで処理しないとアプリケーションソフトの使い分けができなくなったしまったのです。

本書では、AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS のファイルの記述方法のポイントを簡潔に解説していますが、時間のない方ですぐにパソコンを動かしたい方は、PART 4 に実例を豊富に収録しましたので、使っているアプリケーションソフトの AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS、そして起動用バッチファイルをそのまま丸写ししていただければ、十分パソコンは手足となって働いてくれるはずです。

PART 1 では「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」を作り、実際にいくつかのコマンドを入力し、コマンドの働きや MS−DOS が設定している環境の状態などを実際に確認しながら解説してあります。長文を読むよりはるかに早く、AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS で使用するコマンドを理解できると思います。



本書では MS−DOS Ver.5.0 A を中心に解説していますが、一部の機能を除いては MS−DOS Ver.3.3 D で問題なく活用できます。なお、メモリの高度な利用を考えたら、MS−DOS Ver.5.0 A を使われたほうがいいでしょうね。

MS−DOS の起動の仕組み

MS−DOS が起動するまでの流れは、つぎのようになっています。



1. 電源スイッチを入れる（もしくはリセットをする）
   ↓
2. システムの初期化とメモリのチェック
   ↓
3. MSDOS.SYS と IO.SYS を読み込む
   ↓
4. CONFIG.SYS ファイルの実行
   ↓
5. COMMAND.COM を読み込む
   ↓
6. AUTOEXEC.BAT の実行

システムファイル → とは、MSDOS.SYS、IO.SYS、COMMAND.COM の 3 つ の ファイルことで、FORMAT␣／S↵ で作るシステムディスクに、この 3 つのファイルが転送されます

画面上でのメモリチェックは、つぎのように表示されています。

```
MEMORY  640 KB+××××KB
```

この画面を見ると、増設したメモリがパソコンに正常に認識されているかが確認できます。

ハードディスクがつないであると、2 と 3 の間で「固定ディスク起動メニュープログラム」が表示されます。ただし、起動可能な領域がひとつの場合には表示されません。表示された場合は起動する領域を選ぶことになります。

MSDOS.SYS と IO.SYS はシステムファイルと呼ばれるもので、普通 DIR コマンドでフロッピーディスクやハードディスクの中身を表示させても存在が確認できません。エコロジーや FD などのファイル管理ツールを使うと見ることができます。

DIR はディレクト → リの内容を表示させるコマンドです

CONFIG.SYS がない場合は、あらかじめ MS−DOS 側で用意されている環境に設定され、AUTOEXEC.BAT がない場合は DATE と TIME コマンドを実行し、「A>」というプロンプトを表示するように設定されています。

あらかじめ用意さ → れている設定値をデフォルト値といいます

「百聞は一見にしかず フロッピーディスク」の作成

実際に MS－DOS を使いながら基本設定がどうなっているのか、いくつかのコマンドの実行の仕方とその結果をご覧ください。「百聞は一見にしかず」です。長い解説を読むより見るのがいちばんです。

まずは、「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」を作りましょう。A ドライブに MS－DOS Ver.5.0 A の運用ディスク＃1 入れ、B ドライブには新しいフロッピーディスクを入れてください。つぎのようにキーボードから入力し、リターンキーを押してください。



```
A：¥＞FORMAT␣B：／S↵
```

←IO.SYS、MSDOS.SYS、COMMAND.COM の 3 つのファイルがフロッピーディスクに組み込まれます

このコマンドが、システムディスクを作成するコマンドです。

つぎに「¥DOS」というサブディレクトリを、B ドライブに入れてあるいま作ったシステムディスク内に作ります。サブディレクトリの作成コマンドは MD です。つぎのように入力してください。

```
A：¥＞MD␣B：¥DOS↵
```

こんどは、「百聞は一見にしかず」として確認で使ういくつかのファイルを、いま作ったサブディレクトリの「¥DOS」中にコピーします。コピーコマンドは、COPY です。

```
A：¥＞COPY␣A：¥MORE.COM␣B：¥DOS↵
```

←B ドライブの「¥DOS」というサブディレクトリへ MORE.COM というファイルがコピーされます

A ドライブの MS－DOS Ver.5.0 A のシステムディスク＃1 を＃2 に替えてください。

```
A：¥＞COPY␣A：¥MOUSE.COM␣B：¥DOS↵
```

A ドライブの MS－DOS Ver.5.0 A のシステムディスク＃2 を＃3 に替えてください。

```
A：¥＞COPY␣A：¥MEM.EXE␣B：¥DOS↵
A：¥＞COPY␣A：¥SEDIT.EXE␣B：¥DOS↵
```

コピーしたのは全部で 4 つのファイルです

「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」の完成です。

MS−DOS のデフォルト値の状態とは



AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS が設定されていない状態は、どのようなものかみてみましょう。AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の２つのファイルを作成しないで、MS−DOS を立ちあげてみると、それが確認できます。

「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」をＡドライブに入れて、パソコンのリセットボタンを押してください。

すると MS−DOS のバージョンを表示したあと、日付と時間の入力を要求してきます。ここは日付と時間ともリターンキーを押すと、つぎの表示をしてコマンド入力待ちとなります。

```
A>
```



これは自動車でいうニュートラルと同じ状態なのです。

では、MS−DOS のデフォルト(基本の設定)値の状態を確認するために、コマンドを入力してみましょう。

PATH とはサブディレクトリ内のコマンドをほかのディレクトリから利用できるように設定するコマンドです

```
A>PATH↵
パスは定義されていません.
```

上のように表示されます。MS−DOS のデフォルト値の状態では、PATH は設定されていないのです。

システム環境変数については54ページを参照してください

つぎに、システム環境をみてみましょう。システム環境を確認するコマンドは SET です。つぎのように入力してください。

```
A>SET↵
PATH=
COMSPEC=A:¥COMMAND.COM
```

上の２行が画面に表示されます。確かに、PATH は＝の後になにも表示されないので、定義されていないのが確認できます。

COMSPEC はメモリ内の COMMAND.COM がどのドライブから読み込まれているかを表しています。試しに、Ｂドライブに「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」を入れ替えてリセットしてみてください。

COMSPEC＝B：¥COMMAND.COM

と表示されますね。B ドライブに入れた「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」から立ちあがったので、B ドライブの COMMAND.COM が常駐しているのです。

NEC の MS－DOS はハードディスクとフロッピーディスクのドライブ名が固定されていないため、ハードディスク 1 台＋フロッピーディスク 2 台の構成では、ハードディスクから立ちあげればハードディスクが「A ドライブ」でフロッピーディスクが「B ドライブ」と「C ドライブ」、フロッピーディスクから立ちあげればフロッピーディスクが「A ドライブ」と「B ドライブ」で、ハードディスクは「C ドライブ」となってしまいます。ドライブ番号の設定も AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS には重要なことなので、「起動したドライブによってドライブ番号が変化する」ことは覚えておきましょう。



←DOS／V マシン用の PC－DOS や MS－DOS では、ハードディスクのドライブ名は C ドライブに固定されています

内部コマンドと外部コマンド



MS－DOS で使うコマンドは、内部コマンドと外部コマンドに分けられます。内部コマンドは、COMMAND.COM が常駐していれば使えるコマンドで、コマンドを実行するためのファイルは必要としません。それに対して、外部コマンドは実行用のファイルが COMMAND.COM とは別にあります。

たとえば、ファイルのコピーをするときには COPY というコマンドを使いますが、ハードディスクのサブディレクトリの「¥DOS」のなかを捜しても COPY.EXE とか COPY.COM はありません。ファイルがなくても実行できるコマンドが内部コマンドなのです。

外部コマンドとは、DISKCOPY.EXE や FORMAT.EXE などのように実行ファイルがなくては、ディスクコピーやフォーマットができないコマンド群のことです。

パソコン環境設定コマンドの設定状態

MS−DOSの環境設定のなかでも重要なもののひとつに、PATHの設定があります。MS−DOSは、コマンドが入力されると、つぎの順に実行ファイルを捜してコマンドを実行していくのです。

実行ファイルとは拡張子がEXEとかCOM、BATとなっているファイルのことです

内部コマンドか外部コマンドか調べる

↓

内部コマンドなら入力コマンドを実行する

↓

外部コマンドならまずカレントディレクトリでコマンドの実行ファイルを捜し、あれば入力コマンドを実行

↓

PATHで設定されているディレクトリでファイルを捜し、あれば入力コマンドを実行



パスは「コマンド検索パス」とか「コマンドサーチパス」ともいわれています

ハードディスクのなかにいくつものアプリケーションソフトを入れている場合、それぞれは別のサブディレクトリのなかに格納して管理するのが普通です。しかし、MS−DOSはPATHを設定しないとカレントディレクトリ以外は検索しないようになっています。そこで必要なサブディレクトリにPATHを設定して、入力したコマンドをサブディレクトリへ捜しにいくようにします。

「百聞は一見にしかずフロッピーディスク」にサブディレクトリの¥DOSを作ってあるので、ここにPATHを設定し、パスが通った状況を確認してみましょう。

PATHは内部コマンドなので実行ファイルは必要ありません

```
A>PATH␣A:¥;A:¥DOS;↵
```

と入力し、つぎのようにSETと入力してください。



```
A>SET↵
COMSPEC=A:¥COMMAND.COM
PATH=A:¥;A:¥DOS;
```

上のように表示され、PATHが¥DOSに通ったことが確認できます。こんどはプロンプトの「A>」という表示を変更し

てみましょう。つぎのように入力してください。

```
A>PROMPT␣$P$G↵
A:¥>
```



プロンプトの表示が変わります。つぎにディレクトリを移動してみましょう。つぎのように入力してください。

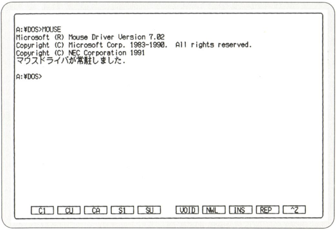
```
A:¥>CD␣¥DOS↵
A:¥DOS>
```

どうですか。移動したディレクトリが表示されていますね。「PROMPT␣PG↵」は、いまどのディレクトリにいるかをプロンプトに表示してくれるコマンドです。

つぎにドライバの組み込み例として、マウスを組み込んでみましょう。

つぎのように入力してください。コマンドを入力したあとリターンキーを押すと、マウスが組み込まれたことが画面に表示されます。「実行コマンド」のなかでもすぐに実行せず、必要なときにだけ起動するプログラムのことを「常駐ソフト」といいます。

●マウスプログラムの常駐した表示画面



← MOUSE とコマンドを入力します

← マウスが組み込まれたことを知らせるメッセージです

メモリの使用状況を見てみよう

MOUSE.COM がどのようにメモリに常駐しているか確認できるコマンドがあります。それは MEM です。

MS－DOS Ver.3.3D のほうは MEM.EXE はありませんので、VMAP.COM (VZ エディタに付属) などをお使いください

MEM は MS−DOS Ver.5.0 A から付属するようになった、メモリマップ表示用のツールなのです。このようなツールは、フリーソフトウェアやサードパーティー製のメモリドライバなどにも付属していることもあるので、使ったことのある人もいると思います。たまにはメモリマップを表示してみるのもおもしろいものです。メモリマップを見ると、確かにいろいろなものがメモリに組み込まれているのが分かります。では、MEM がどのように表示するか見てみましょう。



```
A:¥>MEM␣/D↵
```

と入力すると、表示が上に流れてしまうので、最初の部分は読めません。その場合に役に立つコマンドが MORE です。

```
A:¥>MEM␣/D␣¦␣MORE↵
```

上のように入力します。「¦␣MORE」をつけることで、画面が流れていってしまうのを防ぐことができるのです。表示内容を画面で確認するのではなく、文書ファイルとして読むこともできます。画面表示を文書ファイルとして作成する場合、つぎのように「>」という不等号記号を使って画面出力を A ドライブの「TEST.TXT」というファイルに保存することができるのです。

```
A:¥>MEM␣/D␣>␣A:¥TEST.TXT↵
```

リダイレクトとは、➡キーボードからの入力（標準入力）をディスプレイに表示（標準出力）という流れ（標準入出力）を変更する方法で、ここではディスプレイに出力しないでファイルに出力しています

これはリダイレクトという方法で、本来ならディスプレイに出力される情報をファイルとして保存するコマンドなのです。

MS−DOS には、このように便利なソフトが付属されています。つぎの SEDIT.EXE もなかなか使い勝手のいいエディタなのです。この SEDIT.EXE で、さきほど TEST.TXT というファイルに落とした MEM で表示させたメモリの状況をみてみましょう。つぎのように、コマンドのあとにファイル名を入力してください。

```
A:¥>SEDIT␣TEST.TXT↵
```

■SEDIT でみた TEST.TXT のファイル内容の画面

```
A:¥TEST.TXT                         <挿入>| 25/  33行 | 1桁  空メモリ: 97  [HELP]:説明
 000600       IO           003D60    ｼｽﾃﾑ ﾃﾞｰﾀ ↓
                  CON                  ｼｽﾃﾑ ﾃﾞﾊﾞｲｽ ﾄﾞﾗｲﾊﾞ ↓
                  PRN                  ｼｽﾃﾑ ﾃﾞﾊﾞｲｽ ﾄﾞﾗｲﾊﾞ ↓
                  AUX                  ｼｽﾃﾑ ﾃﾞﾊﾞｲｽ ﾄﾞﾗｲﾊﾞ ↓
                  CLOCK                ｼｽﾃﾑ ﾃﾞﾊﾞｲｽ ﾄﾞﾗｲﾊﾞ ↓
                  A: - D:              ｼｽﾃﾑ ﾃﾞﾊﾞｲｽ ﾄﾞﾗｲﾊﾞ ↓
↓
 004360       MSDOS        00F680    ｼｽﾃﾑ ﾃﾞｰﾀ ↓
↓
 0139E0       IO           005550    ｼｽﾃﾑ ﾃﾞｰﾀ ↓
                           0000C0     FILES=     ↓
                           000100     FCBS=      ↓
                           005190     BUFFERS=   ↓
                           0001C0     LASTDRIVE= ↓
 018F40       COMMAND      0012A0    ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ   ↓
 01A1F0       COMMAND      000100    環境       ↓
 01A300       MEM          000050    環境       ↓
 01A360       MSDOS        005C90    -- 空き --↓
 022090       MOUSE        003BC0    ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ   ↓
 025C60       MEM          017640    ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ   ↓
 03D2B0       MSDOS        062D40    -- 空き --↓
↓
1切り取り 2複写 3貼り付け 4ファイル挿 5コントロール 6検索 7次検索 8置換 9ジャンプ 0終了
```



← Mouse という文字が画面に表示されています。これが MOUSE がメモリに常駐した表示です

こんどは常駐していたマウスのプログラムを解除してみましょう。つぎのように入力すると解除できます。

```
A:¥>MOUSE␣/R↵
マウスドライバのメモリを解放しました.
```

← マイクロソフトのマウスに付属しているマウスドライバは MOUSE␣OFF↵ で常駐を解除できます

メモリから消えているかどうか、もう一度 MEM でメモリの状態をみてみましょう。

```
 004360       MSDOS        00F680    ｼｽﾃﾑ ﾃﾞｰﾀ

 0139E0       IO           005550    ｼｽﾃﾑ ﾃﾞｰﾀ
                           0000C0     FILES=
                           000100     FCBS=
                           005190     BUFFERS=
                           0001C0     LASTDRIVE=
 018F40       COMMAND      0012A0    ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
 01A1F0       COMMAND      000100    環境
 01A300       MEM          000050    環境
 01A360       SCP          002080    ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
 01C3F0       MEM          017640    ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
 033A40       MSDOS        06C5B0    -- 空き --
```

MOUSE の文字がなくなっています。これを「常駐をはずす」とか「解放する」といいます。

MOUSE に限らず、コマンドラインやバッチファイルのなかから組み込めるドライバは、コマンドのあとに「／R」をつけてもう１回実行すると、メモリから解放することができます。また、コマンドの後ろに「／？」をつけて実行すると、パラメータの入力方法などコマンドの使い方を表示してくれます。最近のアプリケーションソフトは、扱いやすくなりましたね。

← フリーソフトウェアには「／」ではなく「－」を使うものもありますが、基本的には同じことです

日本語 FEP の組み込みと取り外し

実用的にアプリケーションソフトを使うためには、日本語 FEP の組み込みは必須です。初期のころは日本語を入力するシステムはワープロソフトの一部だったので、切り放して使うことなどできませんでした。それが日本語 FEP として独立してアプリケーションソフトと離れて使えるようになってからは、CONFIG.SYS や AUTOEXEC.BAT と密接な関係をもつようになってきました。

アプリケーションソフトごとに異なる日本語 FEP を使うという状況からはだいぶ変わってきましたが、それでも日本語 FEP の使い分けが必要なこともあります。この辺は、MS-DOS Ver.3.3 B から用意された ADDDRV と DELDRV を使うことによってかなり便利に使いこなせるようになってきました。ここでは、日本語 FEP の組み込みと取り外し方について解説します。

アプリケーションソフトによっては、標準で添付されている日本語 FEP 以外のものを使うと、いくつかの機能が制限されることがあります

基本の日本語 FEP の組み込みは CONFIG.SYS で

最も標準的な日本語 FEP の組み込み方は CONFIG.SYS での組み込みです。アプリケーションソフトの使い分けなどあまりしないのでしたら、ひとつの日本語 FEP を組み込んでおけば十分パソコンを利用できます。

一太郎 Ver.5 の CONFIG.SYS の例をご覧ください。

```
FILES=30↲
BUFFERS=20↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥EMS 386.SYS↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
A:¥ATOK 8¥ATOK 8.UCF↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 EX.SYS↲
```

Lotus 1-2-3 で ATOK 8 を使う方法は 88 ページを参照してください →

ほかのアプリケーションソフトも使いたい、という人は日本語 FEP の使い分けを考えなければいけません。たとえば表計算ソフトの Lotus 1-2-3 は ATOK 8 には対応していないので、上の CONFIG.SYS のままでは、Lotus 1-2-3 を起動しても日

本語 FEP を使うことができません。もちろん、ATOK 8 を使う方法は用意されていますが、スマートに日本語 FEP を切り替えて利用したい方は、ADDDRV と DELDRV を使った日本語 FEP の使い分け法があります。

日本語 FEP を複数切り替え利用できる ADDDRV と DELDRV

ADDDRV は、本来は CONFIG.SYS で組み込むべきデバイスドライバを、あとから組み込むコマンドなのです。はっきりいって日本語 FEP だけのためにあるようなコマンドです。MS−DOS Ver.5.0 A では、メインメモリを広く使えるような環境が整ってきたので、必要なデバイスドライバははじめから組み込んでおけますので、ドライバを付けたり外したりするのは、ほとんど日本語 FEP だけです。

← ADDDRV と DELDRV は 65、66 ページで解説してあります

ADDDRV はデバイス定義ファイルを指定することによって、デバイスドライバを組み込むことができます。

デバイス定義ファイルは、「DEVICE=」か「DEVICEHIGH=」の書式だけで書かれたファイルです。つぎの WX II +のデバイス定義ファイルをご覧ください。デバイス定義ファイルを作ったら、識別しやすいように拡張子は「DEV」などにするといいですね。ATOK 8 の定義ファイルなら ATOK 8.DEV のようにです。ファイルを分かりやすく識別するためにも拡張子はおおいに活用するといいですね。

■WX II +のデバイス定義ファイル「WX 2.DEV」

```
DEVICE=A:¥WX 2¥WXK.SYS␣/A 1↵
DEVICE=A:¥WX 2¥WX 2.SYS␣/INI=A:¥WX 2¥WX 2 SYS.INI␣/A 1↵
```



上の内容を実行するには、下のように実行すると日本語 FEP の WX II +はメモリに組み込まれます。

```
A:¥>DOS¥ADDDRV␣A:¥WX 2¥WX 2.DEV↵
```

また、日本語 FEP の WX II +を取り外すには、DELDRV をつぎのように実行します。

```
A:¥>DOS¥DELDRV↵
```

メモリの呼び方と種類

ここで、簡単に 98 のメモリ構成とメモリ管理規格について ふれておきましょう。多くの人がメモリについて混乱する原因は、メモリの呼び方があまりにも多いためです。同じ部分のことをいろいろな名称で表現しているので、分かりにくくなっているのです。簡単に名称をまとめておきました。

まずは、起動時のメモリチェックをみてください。

> 640 KB＋××××KB

実際には 640 KB ＋ 384 KB ＝ 1024 KB(1 MB)なのですが、384 KB の ROM エリアは表示されません →

「640 KB」と増設した「××××KB」のメモリは、別々に扱われているのです。これがメモリの区分けです。

実際にユーザーが使えるメモリは、この「640 KB」と増設した「××××KB」2 種類だけなのです。この 2 つの「640 KB」と「××××KB」を、いろいろな名称で呼んでいるだけなのです。

はじめの 640 KB の部分をコンベンショナルメモリと呼びますが、通常はメインメモリと呼ばれています（本書ではメインメモリで統一）。

「＋」の後ろに表示される 1 MB を超えた「××××KB」の部分のメモリは、プロテクトメモリと呼びますが、通常は拡張メモリと呼ばれています（本書では拡張メモリに統一）。

あとのメモリは、この 2 つの「640 KB」と「××××KB」間(640 KB～1 MB の間の 384 KB)にあり、ユーザーが使えない「ROM 領域」として存在しています。

ROM 領域にはハードディスクやサウンドボードの BIOS などが割りあてられています →

以上の 3 つの「640 KB」「××××KB」「ROM 領域」以外には、メモリ領域はありません。あとは、いくつかのメモリ管理規格が、それぞれの領域の全部や一部にいろいろな名称をつけて呼んでいるだけです。



> メインメモリ＝コンベンショナルメモリ＝640 KB
> 拡張メモリ＝プロテクトメモリ＝1 MB 以上のメモリ

これが、基本的な部分の呼び方です。

つぎに上の 3 つの部分の、対応メモリの呼び方、管理規格別の名称を一覧表にまとめました。



■メモリの名称

	別の呼び方	EMS 規格	XMS 規格
メインメモリ 640 KB	コンベンショナルメモリ		
ROM 領域 384 KB	UMA	ページフレーム（一部分）	UMB（一部分）
拡張メモリ 1 MB 以上のメモリ	プロテクトメモリ エクステンドメモリ	EMS メモリ	HMA（一部分） EMB（残り）

XMS 規格では HMA＋EMB＝拡張メモリになります

←UMA とは Upper Memory Area の略です

このように、同じ部分をいろいろな名称で呼んでいるので、分かりにくくなっているだけなのです。それぞれの規格用のメモリドライバを設定すれば、呼び方を意識することなく使えます。

メモリ管理の規格

現在 MS−DOS で使われているメモリ管理規格は、つぎの 4 つです。



EMS ……………………Expanded Memory Specification
XMS ……………………eXtended Memory Specification
VCPI……………………Virtual Control Program Interface
DPMI ……………………Dos Protected Mode Interface

MS−DOS では、ひとつのメモリ管理規格にひとつのメモリドライバが用意されています。

HIMEM.SYS＝XMS
EMM 386.EXE・EMM.SYS＝EMS
DPMI.EXE＝DPMI

←MS − DOS は VCPI には正式には対応していません

この 4 つのメモリドライバです。

まずできたのは EMS 規格なのだ

アプリケーションソフトが大型化してくると、メインメモリだけではメモリが足りなくなってきました。そこで、なんとかもっと多くのメモリを使えないかと考えられてできたのがEMS 規格です。

EMS は Lotus、Intel、Microsoft の 3 社によって提唱された規格です



EMS 規格方式は、ROM 領域の一部を窓口（ページフレーム）として使って、強引にほかのメモリ領域にアクセスする方式です。CPU に 8086、V 30 を使っている拡張メモリがないパソコンでも使うことができるというメリットがあります。

EMS の方式には、ハードウェア EMS とソフトウェア EMS の 2 種類があります。ハードウェア EMS は、メモリボードに EMS 専用の LSI が搭載してあり、この LSI を使って EMS を運用する方法で、機種を選ばなくけっこう速度も速いので重宝されています。CPU が 8086／V 30／80286 の機種は、ハードウェア EMS を使っています。このときの名残で、増設 RAM ボードを EMS ボードといったりするわけです。

ソフトウェア EMS は、いま一般に使われているメモリドライバを使って拡張メモリを EMS メモリとして使う方法です。拡張メモリを有効に使えるのですが、80286 では速度がかなり遅いので、80386 以上の機種で使われています。

現在の主流は XMS 規格なのだ

正式に XMS 対応のメモリドライバがサポートされるまで XMS＝HMA と考えられていた時期がありました

80286 から使えるようになった拡張メモリですが、XMS 規格がでてくるまでは、十分に使われている状況ではありませんでした。やっと MS－DOS Ver.5 になって XMS 規格のドライバが付属したので、拡張メモリも本格的に利用できるようになりました。しかし、XMS 規格がでたため、また新たなメモリの名称が増えてしまいました。困っちゃいますね。

HMA	……High Memory Area
UMB	……Upper Memory Block
EMB	……Extended Memory Block

それが上の 3 つです。前ページの表と比べてください。

UMB は、ROM 領域部分の使っていないすき間を使おうという利用方法です。

HMA は、1 MB を超えたところの 64 KB を利用します。EMB は拡張メモリとほとんど同じです。厳密にいうと拡張メモリから HMA の 64 KB を除いた部分ということになります。

これらのメモリをメモリドライバや、デバイスドライバを使って使いこなすのが、CONFIG.SYS 設定の肝心なところなのです。ここでふれたメモリの名称だけは、頭の隅にでも覚えておいてください。

← HMA や UMB を利用する場合、実際に利用できる RAM があるわけではないので、拡張メモリの一部を割り付けて使用します。その分使える拡張メモリは減少します



CPU 別メモリの使い方

	8086・V 30	286	386・486
HMA	×	○	○
UMB	×	△	○
EMB	×	○	○
EMS	ハード	ハード&ソフト	ソフト

CPU 別にメモリの使い方をみれば、上の表のようになります。286 の UMB が△にしてあるのは、MS−DOS ではサポートしていないのですが、「メモリーサーバーII」などのサードパーティ製のメモリドライバを利用すれば使うことができるからです。286 マシンで、CPU アクセラレータを使って 486 マシンにしてある場合は 386・486 マシンと同様に、メモリを使うことができます。

←286 のパソコンは、CPU アクセラレータを使って 486 のパソコンにし、HMA や UMB を使ったほうが、効率的にメモリを利用できます

CONFIG.SYS のデフォルト値

■CONFIG.SYS のデフォルト値

```
FILES=8
BUFFERS=20
FCBS=4
LASTDRIVE=E:
BREAK=OFF
```

なにも設定していないと、この値になっています →

CONFIG.SYS がファイルとしてルートディレクトリにない場合は、MS−DOS は基本の環境を上記のように設定します。このなかで変更しておかないとまずそうなのは、FILES の数くらいで、あとはデフォルトのまま使っても大丈夫な数値です。

MS−DOS Ver.3.3D と MS − DOS Ver.5.0 A ともに同じデフォルト値です →

現在では、CONFIG.SYS の主たる目的はデバイスドライバの組み込み、それもメモリドライバの設定が第一です。CONFIG.SYS の設定の内容は、次ページからの PART 2 をご覧ください。

PART 2

CONFIG.SYSの書き方

CONFIG.SYS の設定のポイント



FILES については➡29ページを、DEVICE については30ページを参照してください

CONFIG.SYS の基本的な書式はつぎのようになっています。

```
コマンド＝定義
```

具体な例をみてください。

```
FILES＝30↵
DEVICE＝HIMEM.SYS↵
```

⇩ 意味はつぎのようになっています

```
オープンできるファイルの数＝30にしてくださいな
組み込むデバイスドライバ＝HIMEM.SYSだからよろしく
```

なにが書かれているか意味不明だったと思いますが、こんなことをパソコンに連絡していたのです。

CONFIG.SYS では、これ以外の指定の方法はありませんので、「＝」を使わないものが書いてあればそれは間違っていることになります。また、「＝」の前後にスペースを入れて＝の位置をそろえたりしている例も見かけますが、これはやらないほうがいいでしょう。

現在「＝」の左に使用できるコマンドは、つぎの11のコマンドです。

デフォルト値は指定がない場合に自動的に設定される値です➡



■システム設定用コマンド

	コマンド	デフォルト値	標準設定値	重要度
システム状態設定用コマンド	BUFFERS	20	20	60%
	FILES	8	30	100%
	SHELL	256 B	1024 B	80%
	DOS	LOW、NOUMB	HIGH、UMB	100%
	LASTDRIVE	E	―	30%
	BREAK	OFF	OFF	20%
	FCBS	4	4	10%
システム拡張用コマンド	DEVICE	―	―	100%
	DEVICEHIGH	―	―	90%
	INSTALL	―	―	10%

SHELL の設定値は環境変数エリアの大きさです

システム拡張用コマンドで組み込めるデバイスドライバは、つぎのファイルです。

■キャラクタ型デバイスドライバ

HIMEM.SYS　EMM 386.EXE　EMM.SYS
SMARTDRV.SYS　MOUSE.SYS　KKCFUNC.SYS
PRINT.SYS　RSDRV.SYS　SETVER.EXE
NECAIK 1.DRV　NECAIK 2.DRV
FONT.SYS　GRAPH.SYS

←キャラクタ型デバイスドライバとは、文字（キャラクタ）単位でデータを扱うドライバです

■ブロック型デバイスドライバ

RAMDISK.SYS

← ブロック型デバイスドライバとは、ブロック(ハードディスクのセクタなどのひとかたまり）単位でデータを扱うドライバです

以上のファイルは、MS−DOS に付属しているものだけですが、フリーソフトウェアやアプリケーションソフト、MO や CD−ROM などのハード機器に付属しているデバイスドライバなども組み込めます。

キャラクタ型とブロック型の違いは、扱うデータの種類によります。

**ブロック型のデバイスドライバは
ADDDRV で組み込むことができない**

←これだけは覚えておきましょう



このPART 2では、はじめにコマンドについて解説し、そのあとで組み込めるデバイスドライバについて解説します。ただし、アルファベット順ではなく、ファイルに記述する順、重要な順に解説してあります。つまり、後ろへいくほど重要度が低く、通常は使わないか指定しなくてもよいものになります。

また、パラメータやスイッチについても具体例を中心に記述しました。あまり利用しないか不要と思われるパラメータやスイッチについては解説を省略してあります。パソコンを快適に使うには、ここで解説してあるコマンドだけで十分可能です。

「クイックチェック」はコマンドの重要な機能、「ポイント」はコマンドを使用するときの注意点を抜粋してあります。より詳しくは「機能」に記述しました。また「通常の設定」のところに書いてあるように設定すれば、通常のパソコン利用では問題なく運用できるでしょう。

BUFFERS

内部コマンド

設定必要度
60%



■クイックチェック

BUFFERSを大きく設定すると、ディスク装置へのアクセスが高速化できる

■デフォルト

20

■ポイント

バッファひとつで2KBのメインメモリを使うので、あまり多くは設定しない。デフォルトの20が基準値

■通常の設定

BUFFERS=20↵

BUFFERS=20,8 のように指定すると2次的なディスクキャッシュとしても使えますが、普通は使いません。ディスクキャッシュはSMARTDRVなどのディスクキャッシュドライバで設定したほうがいいのです

■機能……………………………………ディスクバッファの設定

ディスクバッファとは、フロッピーディスクやハードディスクとデータのやり取りをするときに、データを一時的にため込むために使う作業領域のことをいいます。ディスクバッファを大きくとればアクセスが高速になりますが、バッファひとつについて約2KBメモリを使うため、大きくすればそれだけ使えるメインメモリを減らすことになります。

普通は20で十分です。MS−DOS Ver.5.0 AやWindowsをインストールするときに作られるCONFIG.SYSでも、特に指定はしないので20が標準と覚えてください。ただし、MS−DOS Ver.3.3 Dを使っている場合、一部のアプリケーションソフトではメモリ不足になることもあるで、10ぐらいに減らして利用してください。

■ディスクバッファの機能

データの書き込み

メインメモリ → ディスクバッファ → フロッピー

一時的にバッファにため込む　まとめて書き込む

データの読み込み

メインメモリ ← ディスクバッファ ← フロッピー

まとめて読み込む　一時的にため込む



FILES

内部コマンド

■クイックチェック

多数のファイルに同時にアクセスするために設定

■デフォルト

8

■ポイント

デフォルトの8では少ないので、30以上を設定

■通常の設定

```
FILES=30↵
```

設定必要度
100%

←8〜255の間で設定できます



←MS－DOS Ver.5.0 Aはインストールすると FILES は 30に設定します

■機能……………………オープンできるファイルの最大数の設定

FILESはちょっと理解しにくいコマンドです。ワープロソフトを使っているときなど、同時に編集している文書ファイルはひとつか2つなのに、なんで30も指定しなくてはいけないのでしょうか。

ワープロソフトを使って文書を編集しているときは、メモリ上でメインのプログラムが働いているわけです。ここで文書ファイルオープンでFILESをひとつ使用。編集している最中に、漢字を変換しているときは辞書ファイルにアクセスするわけです。するとそこでもFILESの数がひとつ増えるのです。また、印刷をしようとすると印刷用のファイルをオープンします。ここでもFILESはひとつ増えます。このようにそれぞれのプログラムや辞書などをひとつのファイルとして考えます。すると、ワープロソフトが動いているとき、実際にはメインのプログラム＋日本語FEP本体＋辞書＋文書ファイル＋印刷用のプログラム＋大きい文書用の作業領域＋etcといくつものファイルを同時に開いている状態になっています。

このような理由でファイルの最大数は想像しているよりも多く設定する必要があるのです。普通は20程度でいいのですが、Windowsでは30以上を指定しなくてはいけません。FILESはデフォルトが8で8〜255の間で設定できます。

←一太郎 forWindows をインストールすると FILES は 80 に設定されます

DEVICE

外部コマンド

設定必要度
100%



■クイックチェック

各種のデバイスドライバをメモリに組み込み、MS−DOSの機能を拡張する

■ポイント

デバイスドライバをメインメモリに組み込むので、あまり多くのデバイスドライバを組み込むとアプリケーションソフトがメインメモリ不足で起動しないことがある

■通常の設定

```
DEVICE＝A：¥DOS¥HIMEM.SYS↵
        │   └ディレクトリ指定
        └ドライブ指定
```

デバイスドライバのドライブとディレクトリの指定は必ず入れるようにします。指定がないとルートディレクトリにない場合は組み込んでくれません。AUTOEXEC.BATでPATHが設定してあっても、CONFIG.SYSはAUTOEXEC.BATより前に読み込まれるためPATH設定の効果はCONFIG.SYSにはありません

■機能……………………………デバイスドライバの組み込み

メモリ管理用のドライバ(HIMEM.SYS、EMM 386.EXEなど)、日本語FEP(ATOK、VJE、松茸など)、周辺機器用のデバイスドライバ(PRINT.SYS、RSDRV.SYS、MOUSE.SYSなど）をメモリに組み込みます。

「DEVICE＝」で指定されたデバイスドライバは、メインメモリに組み込まれるので、MS−DOS Ver.3.3 Dを使っている場合はなるべく組み込むドライバを減らし、メインメモリの確保につとめたほうがいいでしょう。MS−DOS Ver.5.0 Aを使っている場合も、HIMEM.SYS以外はなるべく次ページのDEVICEHIGHでUMBに組み込むようにします。

フロッピーディスクの起動用のCONFIG.SYSを設定するときは、デバイスドライバはルートディレクトリにおいて、ドライブとディレクトリの指定はしません。こうしておくと、AドライブからでもBドライブからでも、アプリケーションソフトを立ちあげることができます。

DEVICEHIGH

外部コマンド

設定必要度
90%



■クイックチェック

デバイスドライバをUMBに組み込み、デバイスドライバがメインメモリを圧迫しないようにしてMS−DOSの機能を拡張する

■ポイント

このコマンドを使うためには、UMBが使えるように設定されている必要がある。またUMBには組み込めないデバイスドライバがある（下記参照)。UMBに空きがない場合はメインメモリに組み込む

■通常の設定

```
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥MOUSE.SYS↵
```

■機能 ……………………デバイスドライバをUMBへ組み込み

MS−DOS Ver.5.0 Aから追加された機能で、デバイスドライバをUMBへ組み込んでメインメモリの消費を極力減らすためのコマンドです。このコマンドを使うためには、UMBが利用できるように確保されていなければいけません。そのためには以下の記述が必須なので、3行ワンセットで利用してください。

← HIMEM.SYSとEMM 386.EXEはDEVICEHIGHでUMBに組み込むことはできません

```
DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥EMM 386.EXE␣/P=128␣
/UMB↵
DOS=HIGH,UMB↵
```



EMM 386.EXEの/P=128の128は、確保するEMSのページ数の指定です。ですから場合によっては数値は変わります。

EMSを使わないでUMBを使う場合は、つぎのように設定します。

```
DEVICE=A:¥DOS¥EMM 386.EXE␣/NOEMS↵
```

← /NOEMSを指定するとUMBは自動的に設定されるので/UMBは記述しません

DOS

内部コマンド

設定必要度
100%



■クイックチェック

HMA 領域に MS－DOS を組み込み、メインメモリの空きを大きくする。UMB を使うためには設定が必須

■デフォルト

LOW、NOUMB

■ポイント

設定をしないと MS－DOS はメインメモリに組み込まれ、DEVICEHIGH を使ってもデバイスドライバがメインメモリに組み込まれるので、使えるメインメモリが減る

■通常の設定

DOS＝HIGH,UMB↲

MELWARE や MEMORY SERVER II を使うときもこのコマンドは有効なので指定するようにしましょう →

■機能…HMA に DOS の一部をロードする。UMB を有効にする

これも MS－DOS Ver.5.0 A から追加された機能で、HMA 領域へ MS－DOS の一部をロードするため、メインメモリの空きが大きくなります。MS－DOS Ver.5.0 A を利用するなら必ず指定しましょう。

HMA の大部分を DOS が使うため、一部の日本語 FEP など HMA にも対応しているものが、HMA を使うことができなくなってしまいます。しかし、HMA に対応している日本語 FEP なら当然 EMS を使うこともできるはずなので、日本語 FEP などは EMS を利用して HMA は DOS にあけ渡します。デフォルトは、「DOS＝LOW,NOUMB」なので、指定しないと DOS は LOW(つまりメインメモリ)にロードされ、UMB は利用できなくなります。

UMB は 80386 以上の機種でないと利用できません。しかも、CPU が 80386 以上でも拡張メモリが増設されていないと利用できません。

SHELL 内部コマンド

設定必要度 80%

■クイックチェック

環境変数領域を拡大するために利用する

■デフォルト

256バイト

←160〜32768まで指定できます



■ポイント

ハードディスク環境ではPATHも長くなるし、SETコマンドで環境変数をいろいろ設定したりもするので、環境変数領域を大きくとっておく。1024バイトを設定すれば十分

■通常の設定

```
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:1024↵
```

←フロッピーディスクのときは、DEVICEのときと同じようにドライブやディレクトリの指定はしません

■機能……………………………コマンドプロセッサの環境の設定

通常、システムで使うコマンドプロセッサを指定します。

SHELLで指定されたコマンドプロセッサは、システム環境変数のCOMSPECに登録されます。

AUTOEXEC.BATファイルで、「SET␣COMSPEC=A:¥COMMAND.COM」で指定することもできますが、SHELLを使うと最後にある「/E:1024」で通常は256バイトの環境変数領域のサイズを大きくとることができます。

大容量のハードディスクを使っていると、PATHがやたらと長くなったりいろいろな変数を「SET」で設定したりするため、256バイトでは環境変数領域が足りなくなったりします。そのときには/E:で大きくとります。160〜32768まで指定できます。フロッピーディスクの場合は256バイト確保すれば通常の使用には十分です。つぎのように書いておきます。

```
SHELL=¥COMMAND.COM¥␣/P↵
```

←これで立ちあげたドライブのCOMMANND.COMがコマンドプロセッサとして指定されます

LASTDRIVE 内部コマンド

設定必要度
30%



■クイックチェック

通常は設定しない

■デフォルト

E

■ポイント

デフォルトはEなので5台までしか設定されていないが、実際につながれているドライブ数が優先される。ドライブ数のチェックはシステム立ちあげのときにおこなう

■通常の設定（CD－ROM ドライブを利用する場合）

```
LASTDRIVE＝Q↲
```

仮想ドライブを使う場合は、LASTDRIVE で大きな数を指定しておかないと、あとから追加してドライブ数を増やすことはできません →

■機能……………………………使用できるドライブの最大数を設定

アクセスできるフロッピーディスクやハードディスクなどのドライブの最大数を指定します。デフォルトはEですが、5台以上のドライブがつながっている場合は、実際の数が優先されるので、特に指定する必要はないコマンドです。

例にあげたQドライブの指定は、CD－ROM ドライブを使うときに通常指定するドライブ名です。PART 4 で CD－ROM ドライブの指定の仕方については解説してありますが、通常は CONFIG.SYS でつぎのように指定します。

```
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥NECCD.SYS␣／D：CD
_101↲
LASTDRIVE＝Q↲
```

Qでなくてもいいのですが、慣習としてこのように指定します →

AUTOEXEC.BAT では、つぎのように指定します。

```
A：¥DOS¥MSCDEX.EXE␣／D：CD_101␣／L：Q↲
```

LASTDRIVE=Q と／L：Q で CD－ROM ドライブはQドライブとして認識されることになります。

BREAK

内部コマンド

■クイックチェック……………………………通常は設定しない

■デフォルト ……………………………………………OFF

■ポイント

ON に設定するとマシンの処理スピードが低下する

■通常の設定

```
BREAK=ON↵
```

■機能 ……………………………ブレークチェックの ON、OFF

STOP キーもしくは CTRL + C キーで作業中断を可能にします。STOP キーの制御もデフォルトは BREAK=OFF に設定されているので、コンソール入出力時とプリンタ出力時以外では有効に働きません。

設定必要度
20%



FCBS

内部コマンド

■クイックチェック……………………………通常は設定しない

■デフォルト ……………………………………………4

■ポイント

1 に設定すると 150 バイトほどメモリが節約できる

■通常の設定

```
FCBS=1↵
```

■機能 ……………………同時にオープンできる FCB の数を設定

FCB（ファイルコントロールブロック）を使ってファイルアクセスをおこなうアプリケーションソフトのために、同時にオープンできる FCB の数を設定します。

設定必要度
10%



←設定値は 1～255 で 0 を設定することはできません

INSTALL 内部コマンド

設定必要度
10%

■クイックチェック

通常は設定しない

■ポイント

AUTOEXEC.BAT で組み込む常駐ソフトを CONFIG.SYS で組み込めるようにする。メインメモリにしか組み込めない

■通常の設定

INSTALL＝A：¥DOS¥SHARE.EXE↵

■機能……………………………………メモリ常駐ソフトのロード

常駐ソフトは TSR ソフトともいいます



通常は AUTOEXEC.BAT で実行するメモリ常駐ソフトを、CONFIG.SYS 内で実行してメインメモリに組み込みます。

バッチファイルでメニューを組んだ場合、リセットしないでメニューのバッチファイルを実行すると、同じプログラムを何度もメモリに組み込んでしまうことになるので、そのような無駄を避けることができます。こう書くと便利なようですが、常駐ソフトはなるべく UMB にロードしたいので、バッチファイルのなかで必要なときだけ組み込んで、いらなくなったら常駐を解除するように設定したほうがいいでしょう。LOADHIGH(LH)コマンドを使えば UMB にロードできますが、INSTALL コマンドではメインメモリにしかロードできません。

LOADHIGH（LH）コマンドは 63 ページを参照してください

このコマンドもあまり使わないほうがいいコマンドです。

HIMEM.SYS　デバイスドライバ

設定必要度 90%

■クイックチェック

拡張メモリが利用できるようになるので、メインメモリ不足から解放される

■ポイント

デバイスドライバとしてはいちばん先に設定する

■通常の設定

```
DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS↵
```

■機能 ……………………… XMSメモリを利用できるように設定

80286以上のCPUを搭載した機種で、1MB以上の拡張メモリをXMSとして利用できるようにします。

HIMEM.SYSを設定することによって、1MB以上の拡張メモリ(HMA領域（約64KB)とそれ以上のEMB領域）が使えるようになり、HIMEM.SYSはこの拡張メモリを管理します。拡張メモリを利用するプログラムは、すべてHIMEM.SYSを通じて拡張メモリを使うことになります。そのため、HIMEM.SYSはCONFIG.SYSのなかで、いちばんはじめにデバイスドライバとして登録する必要があります。

← いまのNECのHIMEM.SYSは、

MS−DOS　Ver.5.0 A.版

↓

Windows 3.1 版

↓

最新のMATE・FELLOW版

と、MS−DOSとして市販されているものよりかなり改訂されているので、なるべく最新版を使うようにします。最新版はXMS 3.0対応になっています

```
BUFFERS=20↵
FILES=30↵
DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS↵
```

このように、デバイスドライバとしては真っ先に設定します。

CONFIG.SYSのDEVICE、DEVICEHIGH、INSTALLで組み込むドライバは、記述してある順に組み込まれますので注意が必要です。それ以外のFILES、BUFFERS、DOSなどのコマンドは、記述の順番は関係ありません。

HIMEM.SYSは、HMAMINとNUMHANDLESというスイッチを持っていますが、通常は指定する必要はありません。

← HMAMINはMELWAREやMEMORY SERVER IIでも設定できるようになっていますが、これもデフォルトの0のままで大丈夫です

EMM 386.EXE デバイスドライバ

設定必要度
90%



Windows 上で MS→−DOS アプリケーションソフトを使う場合、日本語 FEP 用などに EMS が必要なので必ず設定します。EMS を設定しておかないと、日本語 FEP がメインメモリにロードされてしまいメモリ不足になる可能性があります。
容量は日本語 FEP に必要な最小限の量に設定します。WX II ＋や ATOK 8 では、／P＝32 つまり 512 KB 確保すればいいでしょう

■クイックチェック

EMS メモリが使えるようになる。日本語 FEP を EMS へ組み込めるので、メインメモリが広く使える

■ポイント

表計算ソフトでは、大きなワークシートが扱えるようになる。UMB を利用するためには UMB スイッチの設定が必要

■通常の設定

```
DEVICE＝A：¥DOS¥EMM 386.EXE␣／P＝128␣／UMB↵
```

■機能 ……………… 仮想 8086 用拡張メモリマネージャの設定

CPU が 80386 以上の機種用の、仮想 EMS ドライバです。このドライバを組み込むことによって、EMS と UMB が使えるようになります。ただし、HIMEM.SYS といっしょに組み込まなくては使えません。HIMEM.SYS は必ず EMM 386.EXE より前に組み込むのが原則です。

／P＝は確保する EMS の大きさを、ページ単位(1 P＝16 KB)で指定するスイッチです。上のように 128 を指定すると、2 MB (128×16 KB＝2048 KB)確保されます。／M＝2048 のようにメモリサイズで指定するスイッチもありますが、通常は／P＝を使います。

この容量は、増設メモリの量などのメモリ環境で左右されますので、最適値はありません。

RAMDISK.SYS と SMARTDRV.SYS には／E スイッチ（ラムディスク・ディスクキャッシュを EMS メモリ上に確保する）があります。それにより、拡張メモリのすべてを EMS に設定してしまう方法もあるのですが、普通はそれぞれ拡張メモリ上に確保しますので、あまり使わないほうがいいでしょう。

／UMB は UMB を利用するために必須のスイッチなので、必ずつけます。

EMM.SYS　デバイスドライバ

設定必要度
70%



■クイックチェック

8086／V 30／80286 マシンで、EMS メモリが使えるようになる

■ポイント

このメモリドライバでは UMB が使えないので、できればサードパーティー製のメモリドライバを使うようにする

■通常の設定

```
DEVICE=A:¥DOS¥EMM.SYS␣/P=128↵
```

■機能 ……………………………………………… EMS メモリの設定

CPU が 8086 や V 30、80286 の機種用の EMS メモリドライバです。EMM 386.EXE と違い、UMB は使えません。80386 以上の CPU でも使えますが、通常は 80286 までで、80386 以上は EMM 386.EXE を使います。

／P=は EMM 386.EXE と同じで、ページ単位(1 P=16 KB)で EMS を確保するためのスイッチです。それ以外は指定しなくてもいいでしょう。8086 や V 30 のパソコンでこのメモリドライバを使うときは、メモリはすべて EMS になります。80286 の場合は、増設されたメモリ量とほかに使うドライバによって変わります。

しかし、80286 マシンを使うならメモリドライバは MELWARE や MEMORY SERVER II を使うことをおすすめします。これらのメモリドライバは、286 マシンでも UMB を利用できるようになっています。また、MS−DOS Ver.3.3 D では DEVICEHIGH が使えませんが、それぞれのメモリドライバにはデバイスドライバを UMB へ組み込むための専用プログラムが付属しているので、これを使うことによってメインメモリの空きを大きくすることができます。これらの使い勝手は EMM.SYS とは雲泥の差があります。

← MELWARE には UMBLOAD.SYS が付属し、MEMORY SERVER II には LUMB.COM が付属しています

SMARTDRV.SYS デバイスドライバ

設定必要度
70%

ディスクキャッシュの容量は、128〜8192が指定できます →



先の数字でディスクキャッシュの容量を指定し、後ろの数字で最小のキャッシュサイズを指定します。SMARTDRV.SYS には、メモリが足りなくなってくるとディスクキャッシュ用に確保したメモリを解放する機能があるので、どこまで解放するかを設定します →

■クイックチェック

ディスクキャッシュを設定すると、ディスクアクセスが高速化できる

■デフォルト

256 KB

■ポイント

ディスク装置から一度読み込んだデータは、設定したメモリ量まではディスクキャッシュに保持されているので、二度めに読み込むときはディスク装置ではなく、メモリから読み込むのでアクセスが速くなる

■通常の設定

```
DEVICEHIGH = A : ¥DOS¥SMARTDRV.SYS ␣
2048␣256↵
```

■機能……………………………………ディスクキャッシュの設定

ディスクアクセスを高速化するための、ディスクキャッシュ機能を設定します。キャッシュは拡張メモリに確保されますが、/E スイッチをつけると EMS メモリに確保されます。

WindowsVer.3.1 をインストールすると、ディスクキャッシュ用のドライバは Windows 付属の SMARTDRV.EXE に変更され、二重に設定されます。

■CONFIG.SYS の記述

```
DEVICE = A : ¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE␣/
DOUBLE_BUFFER↵
```

■AUTOEXEC.BAT の記述

```
A : ¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE↵
```

上は一部のハードディスクに誤動作が起こるのを防ぐ設定。

MOUSE.SYS デバイスドライバ

設定必要度
20%

■クイックチェック

このデバイスドライバを組み込んでも、アプリケーションソフトがマウスに対応していなければ使えない

■ポイント

マウスにはマウスコネクタにつなぐバスマウスと、RS−232 C コネクタにつなぐシリアルマウスがある。普通はバスマウスを使う。このデバイスドライバもバスマウス用

←マウスのドライバは MOUSE.SYS と MOUSE.COM が付属していて、場合によって使い分ける必要があります



■通常の設定

DEVICE＝A：¥DOS¥MOUSE.SYS↵

■機能……………………………………マウスドライバの組み込み

バスマウスが使えるようになります。／I：という割り込みベクタを設定するスイッチがありますが、通常は指定しないで、デフォルトの 15 H に設定します。

RSDRV.SYS デバイスドライバ

設定必要度
10%



■クイックチェック

普通は設定しない

■ポイント

RS−232 C を使うアプリケーションソフトは、専用のデバイスドライバが付属しているので設定する必要は少ない

■通常の設定

DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥RSDRV.SYS↵

■機能 ……………………………RS−232 C 用ドライバの組み込み

パソコン通信などで RS−232 C を利用するために設定。通信用のソフトは専用のドライバを内蔵しているので設定不用。

RAMDISK.SYS デバイスドライバ

設定必要度
70%



■クイックチェック

拡張メモリを高速なディスク装置として使えるので、RAMディスクを利用して作業を高速化することができる

■ポイント

XMSメモリに設定すると高速に動作する

■通常の設定

```
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥RAMDISK.SYS␣1024↵
```

■機能 ……………………………………RAMディスクの設定

メモリの一部をRAMディスクで使えるように設定します。確保容量はKB単位で指定しますが、128の倍数になるように指定します。論理セクタ長とディレクトリ数も指定できますが、デフォルトのままでOKです。

／Mでメインメモリに、／EでEMSメモリにRAMディスクを設定できますが、これも通常は使いません。

RAMディスクはアクセスが高速で、しかもディスクと同じ感覚で扱えるためたいへん便利です。メモリに余裕があればぜひ設定したいものです。アプリケーションソフト実行時でも、作業ディレクトリをRAMディスクに設定することによって作業が高速化できます。データベースソフトでRAMディスクを作業領域に指定しておくと、ソートや検索が高速になります。

一太郎Ver.5では作業領域にソフトウェアEMSが指定できないので、2MBほどのRAMディスクを作業領域に設定すると動作速度が向上します。

1.5MB以上をRAMディスクに設定すると、フロッピーディスク1枚を丸ごとRAMディスク内に入れられるので、フロッピーディスクを操作する場合、便利です →

KKCFUNC.SYS デバイスドライバ

■クイックチェック

MS－DOS Ver.5.0Aで日本語FEPを使うときには必ず設定する

■ポイント

日本語 FEP より前に設定する

■通常の設定

DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↲

■機能 ……………………… DOSSHELL での日本語 FEP の管理

MS－DOS Ver.5.0 A 対応の日本語 FEP を組み込む前に組み込みます。MS－DOS Ver.5.0 A で追加された日本語 FEP 切り替え機能の管理をします。MS－DOS Ver.5.0 A を使う場合は、無条件で組み込んでおいたほうが安全です。

設定必要度
90%

←ハードディスクで何種類かの FEP を切り替えて利用している場合は必須です



PRINT.SYS デバイスドライバ

■クイックチェック

このデバイスドライバを組み込むと、MS－DOS のコマンドラインから印刷が可能

■ポイント

印刷機能を持ったアプリケーションソフトはそれぞれ専用のプリンタドライバが付属しているので、組み込む必要はないが、簡易印刷機能のついたエディタなどでは PRINT.SYS が組み込まれていないと印刷できないものもある

■通常の設定

DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥PRINT.SYS↲

■機能 ……………………………… プリンタドライバの組み込み

PC－PR 201 系のプリンタドライバが組み込まれます。

設定必要度
40%

←MS－DOS をインストールすると自動的に組み込まれますが、必要のない場合は外すようにしましょう



NECAIK 1.DRV NECAIK 2.DRV

デバイスドライバ

設定必要度
90%



■クイックチェック

MS－DOS Ver.5.0 A に付属している日本語 FEP が使えるようになるので、コマンドラインでも漢字が使える

■ポイント

EMS メモリが設定してあれば、自動的に EMS に組み込まれる

■通常の設定

この順番を変えて→
はいけません

```
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
DEVICE＝A：¥DOS¥NECAIK 1.DRV↵
DEVICE＝A：¥DOS¥NECAIK 2.DRV␣A：NECAI.
SYS↵
```

■機能 ……………………………「AI かな漢字変換」の組み込み

MS－DOS Ver.5.0 A 付属の NEC 製の日本語 FEP「AI かな漢字変換」が組み込まれます。ドライバは KKCFUNC→NECAIK 1→NECAIK 2 の順番で組み込まなくてはいけません。

このドライバがあるので、とりあえず MS－DOS Ver.5.0 A を買ってくれば日本語入力ができます。

MS－DOS Ver.5.0 A→Windows と続けてハードディスクにインストールしたときや、ハードディスクにインストール済みの 98 を買ってきたとき、Windows のインストール中に名前などを漢字で入力するとき使うのがこれです。

以前の MS－DOS に付属していたものよりは格段に進歩しているみたいですが、使っているという人に会ったことはほとんどありません。

キーアサインも変更できるようになっているし、EMS があれば自動的に EMS にロードされます。

PART 3

AUTOEXEC.BATの書き方

AUTOEXEC.BAT の設定のポイント

バッチファイルってなに?

テキストファイル➡は、文字だけで構成されたファイルのことです

バッチファイルとは、複数の実行コマンドを1行にひとつずつ書き連ね、BAT という拡張子をつけたテキストファイルのことです。

MS−DOS では、このバッチファイルがあれば、書いてあるコマンドを連続実行してくれます。これを「バッチ処理」といいます。

注意しなくてはいけないのは、バッチファイルを作ったときのファイル名の付け方です。

バッチファイルは外部コマンドと同じように、プロンプトから実行するときに、BAT の拡張子をつけなくても実行してくれます。FORMAT と入力すればフォーマット用のプログラムが実行されますが、実際には FORMAT.EXE が実行されているのと同じです。

そこで、たとえば FORMAT のパラメータを指定したつぎの内容のバッチファイルを作ったとします。



```
FORMAT␣B：␣／S↲
```

このバッチファイルを実行すると、すぐに B ドライブでシステムディスクが作れるようになりますが、ファイル名をコマンド名と同じ FORMAT.BAT にしてはいけないのです。MS−DOS では外部コマンドを実行するときは、拡張子をつぎの順で検索するようになっています。

この3つの拡張子➡がついたファイルを実行ファイルといいます

```
. COM →. EXE →. BAT
```

もちろん同じファイル名をつけても BAT ファイルを実行させるテクニックはありますが、なにもわざわざ予約語をファイル名に使う必要もないわけです。ですから、

バッチファイル名はコマンドと同じファイル名にはしない

と覚えておいてください。

AUTOEXEC.BAT は特別なバッチファイル



AUTOEXEC.BAT も拡張子が BAT なのでバッチファイルです。PART 1 でみた起動の順番のように、MS−DOS はバッチファイルでも AUTOEXEC.BAT だけは、システムが起動すると自動実行するようになっています。

AUTOEXEC.BAT は、CONFIG.SYS では設定できないシステム環境の設定や常駐ソフトの組み込み、ADDDRV を使った日本語 FEP の組み込みなどをおこなって、アプリケーションソフトが使える環境を整えます。

← システム環境変数は 49 ページを参照してください

アプリケーションソフトをフロッピーディスクで運用していたころは、環境を整えてから個々のアプリケーションソフトを自動立ちあげていたのですが、ハードディスクの利用が主流になったいまでは、主に AUTOEXEC.BAT はメニューシステムを立ちあげるため、ファイルそのものをメニューバッチファイルにして利用しています。

本書で扱っているコマンドは、AUTOEXEC.BAT での使い方を中心に解説しますが、そのほかのバッチファイルでも利用できるよう配慮しました。

バッチファイルのなかには、外部コマンドや内部コマンド、そしてアプリケーションソフトのファイル名など、実行できるコマンドならなんでも書くことができます。ほかのバッチファイル名も、もちろん実行可能なコマンドなので書くことができます。

ただし、バッチファイルからバッチファイルを呼び出すと、元のバッチファイルには戻れなくなります。MS−DOS Ver.5.x では CALL コマンドが追加されたので、この問題は解消されました。しかし MS−DOS Ver.3.x ではなにかしらの工夫をしないといけません。バッチファイルでメニューを作るときには必要なことなので、後ほどふれさることにします。

← CALL は 58 ページを参照してください

主に使われるコマンド

AUTOEXEC.BAT は主に環境設定のために利用するので、環境設定を中心にして解説します。大きく分けると、内部コマンド群、外部コマンド群、システム環境変数群の 3 つのグループに分けられます。

内部コマンドと外➡部コマンドについては13ページを参照してください



■内部コマンド

```
REM  ECHO  PATH  SET  PROMPT  PAUSE
CALL  IF  GOTO  FOR  LOADHIGH
```

■外部コマンド

```
BATKEY  ADDDRV  DELDRV  DOSKEY
```

■システム環境変数

```
COMSPEC  PATH  PROMPT  TEMP
DOSDIR  DIRCMD
```

主に使うコマンドやシステム環境変数は、このようなところです。PATH と PROMPT が内部コマンドと環境変数の両方にあります。これは、バッチファイルを見たとき、けっこう頭を悩ます部分なので先にふれておきましょう。

コマンドでいろいろパソコン環境を設定していっても、最終的に設定結果が反映されるのは「システム環境変数」の部分なのです。ここをどう変更するかが重要で、そのためにいくつかの方法があるということなのです。

PROMPT を例にあげれば、「A>」を「A:¥>」に変更するための「PG」を実行する場合、

```
PROMPT␣$P$G↵ ……………………………………①
SET␣PROMPT=$P$G↵ …………………………②
```

の2つの方法があります。

①は PROMPT コマンドを使って、環境変数の PROMPT を変更しています。②は SET コマンドを使って、環境変数の PROMPT を変更しているわけで、結果はどちらも同じです。

PART 2 でも解説したとおり、COMSPEC の設定も3つあります。SHELL で指定する方法と SET を使う方法、それになにも指定しないでも PART 1 でみたように立ちあげたドライブの COMMAND.COM が登録される、3つの方法です。これも結果は同じで、方法の違いにすぎません。

このように、環境変数を設定するにはいくつかの方法がある、

ということだけを覚えてください。

PART 2 の CONFIG.SYS と同じように、PART 3 のコマンドも AUTOEXEC.BAT ファイルに書く順に記述してあります。そのためシステム環境変数は独立した PART で解説するのではなく、SET コマンドの部分に組み込んで解説します。

システム環境変数



環境変数とは COMMAND.COM が確保する「環境エリア」に置ける変数です。バッチファイルやアプリケーションソフトはこの変数を参照することができるので、あらかじめ環境変数を登録しておくか、もしくはバッチファイルのなかで登録することによって、情報のやり取りやアプリケーションソフトの制御ができます。

システム環境変数は、あらかじめシステムによって予約された環境変数で、MS−DOS のシステムが特定目的のために参照します。

それ以外は、ユーザーもしくはアプリケーションソフトが登録して利用できる「ユーザー環境変数」です。ユーザー環境変数名は自由（といっても MS−DOS の制限内ですが）につけられます。TOKYO でもいいし、OSAKA でも NAGOYA でもいいわけです。

フリーソフトウェアのファイル管理ソフトなどで、外部のエディタやページャーを呼び出すために、EDITOR や PAGER などの環境変数を設定します。アプリケーションソフトで、ユーザー環境変数の設定が指示されている場合は必ず設定します。アプリケーションソフトのインストール時に「AUTOEXEC.BAT の自動書き替え」を選択しないで自分で書き直しや追加をする場合、サンプルファイルのなかの、

← 一太郎 5 では「JW2P」という環境変数を設定しています

```
SET　XXX＝・・・
```



の部分は必ず書き加えるようにします。環境変数は起動時以外にも参照する場合があるので、書き加えないでいると、ときにはハングアップの原因にもなります。

REM 内部コマンド



■クイックチェック

バッチファイルのなかにコメントを入れられるので、分かりやすいバッチファイルを書くことができる

■ポイント

実行コマンドの前に REM をつけると、コマンドの実行を止められる。MS－DOS Ver.5 では，CONFIG.SYS でも REM を使うことができる

REM の代わりに「：」を使うこともできます。通常は IF 文 や GOTO 文のジャンプ先のラベルとして「：」を使用します

■通常の設定

```
REM␣環境変数を SET します↵
    └ここにコメントを書きます
```

■機能……………………………注釈行（コメント行）を作る

REM が行頭についている行は、注釈行と判断されます。ECHO が ON なら画面に表示され、OFF なら表示されません。バッチファイルを見やすく、もしくは理解しやすくするために使います。以下は一太郎の AUTOEXEC.BAT ですが、REM で注釈を入れてみました。



```
REM␣環境変数を設定します↵
SET␣JW2P=A:¥TARO5;A:¥JW2;↵
PATH␣A:¥JUST5;↵
PROMPT␣$P$G↵
ECHO␣OFF↵
REM␣日付と時間を入力します↵
REM␣DATE↵
TIME↵
ECHO␣ON↵
REM␣一太郎を起動します↵
JXW↵
```

DATE は前に REM があるので実行されません。このように、削除をしなくてもコマンドの実行を止められるので、もとのファイルに加えた変更を残すことができます

アプリケーションソフトの環境を変更したいとき、バッチファイルを作った当人がいなくても理解の手助けになりますね。

ECHO　内部コマンド

■クイックチェック

バッチファイルを実行した場合、画面表示を止めることができるのでバッチファイルの処理を速くすることが可能

← ECHOをコマンドラインから実行すると、現在のECHOが`OFFかONかの状態を表示します

■ポイント

画面表示をすれば、それだけパソコンが処理する作業が増えるので、全体の実行速度は低下する。不必要な画面表示はしないようにする



■通常の設定

ECHO␣OFF↲ ……………………………………………①
ECHO␣ON↲ ……………………………………………②
ECHO␣ディスクを入れてください。↲ ………………③

← MS－DOS Ver.5では、@ECHO␣OFF↲と設定することでECHO　OFF自身の表示を止めることができます

■機能………………画面表示の制御とメッセージの表示が可能

このコマンドは、デフォルトがONなので、初めて使うときはOFFから使うことになります。

①のように指定すると、コマンド実行行の表示を停止できます。

②のように指定すると、コマンド実行行の表示ができます。

表示を抑止できるのはコマンド実行行だけなので、コマンドが実行された場合のメッセージは表示されます。

ADDDRVで日本語FEPを組み込んだ場合、たとえばECHO　ONの状態だと、「ADDDRV　ATOK 8.DEV」などの実行行が画面に表示されてから、日本語FEPがメモリ内に組み込まれたというメッセージが表示されます。またECHO　OFFの状態では、「ADDDRV　ATOK 8.DEV」が表示されないで日本語FEPがメモリ内に組み込まれたメッセージだけを表示されます。

③はメッセージの表示に使います。ECHO　ONの状態で実行すると「ECHO　ディスクを入れてください。」とECHOコマンドまで表示されてしまいます。そこでメッセージを表示するときは、その前に「ECHO　OFF」を設定しておきます。

PATH

内部コマンド



■クイックチェック

PATH を設定しておくと、ドライブ名やサブディレクトリ名を指定しないでコマンドを入力しても、ほかのサブディレクトリにあるコマンドを実行させることができる

■ポイント

PATH が設定されていないと、コマンド名だけを入力すると外部コマンドはカレントディレクトリにあるものしか実行されない

■通常の設定

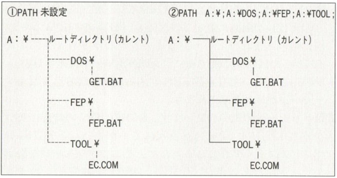
```
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥JUST5;↵
```

■機能……………………………コマンド検索パスの設定と表示

外部コマンドが入力されたときに、COMMAND.COM が入力コマンドを捜しにいくディレクトリを指定します。

COMMAND.COM は、まず内部コマンドかどうかを調べてから、つぎにカレントディレクトリを捜します。PATH が設定されていないとこれ以上は捜しません。PATH が設定されていれば、コマンドサーチパスとして順に捜します。

図をご覧ください。実線は、PATH が設定してある状態で、点線は、設定されていない状態を表します。



コマンドラインから「PATH↵」とだけ実行すると、設定されているパスを表示します。「PATH ; ↵」とセミコロンをつけて実行すると、設定された PATH を削除できます。なお、PATH は「;」でくぎり、半角文字で最高 122 文字まで設定できます。123 文字からは無視されます。PATH は SET コマンドでも設定できます



①の状態では、ルートディレクトリからGET.BATやFEP.BATを実行しても、カレントディレクトリしか捜さないので、「コマンドまたはファイル名が違います.」のメッセージが表示されます。

②のようにPATHを設定しておけば、COMMAND.COMはサブディレクトリのDOS、FEP、TOOLへコマンドを捜しにいきコマンドは実行されます。

ここで注意しなくてはいけないのが、ルートディレクトリではなくカレントディレクトリ→コマンドサーチパスの順にコマンドを捜すということです。普通はカレントディレクトリはルートディレクトリになっている場合が多いので、ルートディレクトリに置いてあるコマンドはすぐ実行できます。しかし、ハードディスク中心の現状では、必ずしもルートディレクトリにいるとは限りません。

```
③PATH  A:¥DOS;A:¥FEP;A:¥TOOL;      ④PATH  A:¥;A:¥FEP;A:¥TOOL;

A:¥ ──ルートディレクトリ               A:¥ ──ルートディレクトリ (カレント)
      ├──DOS¥                                ├──DOS¥
      │     GET.BAT                          │     GET.BAT
      ├──FEP¥ (カレント)                     ├──FEP¥
      │     FEP.BAT                          │     GET.BAT
      └──TOOL¥                               └──TOOL¥
            EC.COM                                 GET.COM
```

← カレントディレクトリがルートディレクトリにない場合と、同じ名前のバッチファイルを起動する場合のパスの流れ



③のようにカレントディレクトリがFEPだった場合、PATHに「A：￥；」とルートディレクトリも指定しておかないとルートディレクトリにあるコマンドは実行できません。これはPATHを設定するとき忘れやすいので注意しょう。

④のように同じファイル名のバッチファイルが別々のディレクトリにある場合、PATHで指定された順に捜すので、ルートディレクトリからGET.BATを実行するとサブディレクトリのDOSはPATH指定されていないので飛ばし、サブディレクトリのFEPにあるGETが実行されます。TOOLにあるGETを実行したいときは、

```
A:¥>A:¥TOOL¥GET↵
```

とフルパスで指定します。



SET 内部コマンド



■クイックチェック

> コマンド検索パスや環境変数を設定することで、MS－DOS が使いやすくなる

■ポイント

> システム環境変数に限らず、アプリケーションソフトでSET コマンドを使って環境変数を設定するように指示がある場合は、必ずバッチファイルに設定する。アプリケーションソフトが起動しなかったり、途中で止まったりする原因になることがあるので注意

■通常の設定

システム環境変数 ➡ 設定する例です



```
SET␣PROMPT＝$P$G↵
SET␣PATH＝A：¥；A：¥DOS；↵
SET␣COMSPEC＝A：¥COMMAND.COM↵
SET␣TEMP＝F：¥↵
SET␣DOSDIR＝A：¥DOS↵
SET␣DIRCMD＝／W／P↵
```

■機能……………………………………………環境変数の設定と表示

SET コマンドは、環境変数の登録と削除をおこなうコマンドです。環境変数を削除する場合、たとえば TEMP を削除するなら、つぎのように入力すると削除されます。

```
A：¥＞PATH␣TEMP＝↵
```

SET とだけ入力すれば、現在設定されている環境変数を表示します。

例えばの表示です ➡ ので、右の画面表示にならなくても問題ありません

```
A：¥＞SET↵

COMSPEC＝A：¥COMMAND.COM
PROMPT＝$P$G
PATH＝A：¥；A：¥DOS；
TEMP＝F：¥
```

```
DOSDIR＝A：¥DOS
DIRCMD＝／W／P
```

システム環境変数



SET で設定するシステム環境変数は、つぎのとおりです。

①COMSPEC

MS－DOS が、COMMAND.COM を再ロードするときに参照する環境変数です。ここに指定されている COMMAND.COM がロードされます。PART 2 で解説した SHELL コマンドでも登録できます。／E スイッチで環境変数領域が拡大できるので、通常は SHELL で設定したほうがいいですね。

②PROMPT

デフォルトで「A>」になっているプロンプトの表示を変更するための環境変数です。

＄P を指定しておくと、カレントディレクトリのフルパスを表示してくれるので、いまどのディレクトリにいるのかがすぐに分かり便利です。＄P 以外にも、以下の表のようにいろいろと用意されていますので、文字列を指定することもできます。組み合わせるとおもしろいプロンプトを作ることができます。

←$P を設定すると、プロンプトを表示するたびにカレントドライブとカレントディレクトリを確認します。ハードディスクでは問題ありませんが、フロッピーディスクがカレントドライブのときディスクが入っていないとエラーが表示されます



■PROMPT で使える指定

指定文字	内容	表示
$N	カレントディレクトリのドライブ名	A
$P	カレントディレクトリのフルパス名	A：¥DOS
$V	MS-DOSのバージョン	MS-DOSバージョン5.00
$D	現在の日付	1994－06－15(水)
$T	現在の時刻	13：33：20.10
$G	「>」を表示	>
$L	「<」を表示	<
$B	「|」を表示	|
$$	「$」を表示	$
$Q	「＝」を表示	＝
$_	改行	
$H	バックスペースを出力	
$E	エスケープコード（^ [）を出力	

以上のほかに、エスケープシーケンスを使って色を変えたり、表示場所を変えたりすることも可能です。

基本的な PROMPT 文は、つぎの内容が最適です。



```
PROMPT=$P$G
```

③PATH

環境変数の PATH に登録されているディレクトリがコマンドサーチパスになります。PATH コマンドでも、SET コマンドでも設定することができます。

④TEMP(TMP)

MS－DOS は、パイプ処理をするときの中間ファイルをここで設定されたディレクトリに作ります。DOS シェルもこのディレクトリにテンポラリファイルを作成します。アプリケーションソフトでもこの変数を参照して作業ディレクトリに使うものがあるので、できれば RAM ディスクを指定しておきたいものです。処理速度が向上します。

テンポラリファイル → ルは一時作業ファイルのことです。アプリケーションソフトが正常に動作していれば、使用後に自動的に削除されます

TEMP は TMP でもかまいませんが、MS－DOS Ver.5.x をインストールすると TEMP で設定されるので、TEMP にしておいたほうがいいでしょう。

⑤DOSDIR

DOS シェルを実行するためのファイルがあるディレクトリを設定します。通常は「A：¥DOS」です。

DOS シェルを使わないのなら設定する必要はありません。

⑥DIRCMD

DIR はディレクト → リの情報を表示するためのコマンドです

厳密にいうとシステム環境変数とはいえませんが、DIR コマンドを実行するときのスイッチを、あらかじめ設定する環境変数です。「DIRCMD＝／W／P」と設定しておくと、DIR と入力するだけで、実際には「DIR␣／W␣／P」が実行されます。

設定したスイッチを使いたくなければ「DIR␣／－W↵」とマイナスをつけて実行します。そうすれば「DIR␣／P」だけが実行されます。

PROMPT

内部コマンド

■クイックチェック

コマンドラインの「A>」の表示を変更できる。「PG」と設定すると、カレントディレクトリがフルパスで表示されるので、サブディレクトリに移動したときに便利

■ポイント

SET コマンドで設定することもできる

■通常の設定

PROMPT␣PG↵

■機能……………………………………………プロンプトの設定

システム環境変数の PROMPT を設定します。

← 標準のプロンプトに戻すときは PROMPT↵ と入力します。詳しくはシステム環境変数の部分を参照してください



PAUSE

内部コマンド

■クイックチェック

バッチファイルの実行を途中で止め、画面表示を確認できる

■ポイント

バッチファイルがうまく働かないときや、途中でエラーメッセージが表示されるとき、何カ所かに PAUSE を入れ、動作確認に利用する

■通常の設定

PAUSE↵
PAUSE␣G ドライブにディスクを入れてください。↵

■機能……………………………………バッチ処理の一時停止

このコマンドが書いてあると、バッチ処理は一時中断されます。ディスクの入れ替えなどをしてほしいときに設定します。



ECHO が OFF だとメッセージが表示されませんので、ECHO OFF が設定してあったら、PAUSE の前に

← ECHO ON を指定します。

また、一時停止を利用してバッチファイルのデバッグもできます

CALL

内部コマンド



■クイックチェック

バッチファイルを多重化して使えるので、アプリケーションソフトを使い分けるメニューでの利用が最適

■ポイント

バッチファイルをサブルーチンのように使える

■通常の設定

CALL␣TARO 5.BAT↵

■機能……………………………ほかのバッチファイルを呼び出す

このコマンドを使うと、ほかのバッチファイルを呼び出してから元のバッチファイルに戻ることができます。

MS−DOS Ver.3.x までは、バッチファイルからバッチファイルを呼び出すと元のバッチファイルには戻れませんでした。

MS−DOS Ver.3.x でも、それぞれのバッチファイルを細かく分けておけば、MS − DOS Ver.5.x と同じように使えます

呼び出したバッチファイルの最後に元のバッチファイル名を書いておけば戻ることはできますが、元のバッチファイルはまたはじめから実行されてしまいます。

しかし、CALL を使ってほかのバッチファイルを呼び出すと、呼び出されたバッチファイルが終了すれば、元のバッチファイルの CALL のつぎの行が実行されます。このコマンドを利用すれば、簡単なメニューファイルならすぐ作成できますね。以下に、いままでの場合と CALL を使った場合の簡単なメニューバッチファイルの例をあげます。

■いままでの場合

```
MENU.BAT

PROMPT␣$P$G↵
BATKEY␣0↵
IF␣ERRORLEVEL==2␣GOTO␣2↵
IF␣ERRORLEVEL==1␣GOTO␣1↵
IF␣ERRORLEVEL==0␣GOTO␣0↵
:2↵
DISKCHEK.BAT↵
:1↵
A_DIR.BAT↵
:0↵
CLS↵
```

```
DISKCHEK.BAT

ECHO␣OFF↵
CHKDSK␣A:↵
MENU.BAT↵
```

```
A_DIR.BAT

ECHO␣OFF↵
DIR␣A:/W↵
MENU.BAT↵
```



←2つのバッチファイルに入って作業終了後、元のバッチファイルの先頭に戻ります

■CALLを使った場合

```
MENU.BAT

PROMPT␣$P$G↵
:START↵
BATKEY␣0↵
IF␣ERRORLEVEL==2␣GOTO␣2↵
IF␣ERRORLEVEL==1␣GOTO␣1↵
IF␣ERRORLEVEL==0␣GOTO␣0↵
:2↵
CALL␣DISKCHEK.BAT↵
GOTO␣START↵
:1↵
CALL␣A_DIR.BAT↵
GOTO␣START↵
:0↵
CLS↵
```

```
DISKCHEK.BAT
ECHO␣OFF↵
CHKDSK␣A:↵
```

```
A_DIR.BAT
ECHO␣OFF↵
DIR␣A:/W↵
```



←バッチファイルを呼び出して作業した後、呼びだし行の下に戻ります

IF

内部コマンド



■クイックチェック

バッチファイルのなかで条件分岐ができるので、バッチファイルの自動実行を条件判断をさせながら実行できる

■ポイント

条件判断をいくつか続けるときは、後ろに書くコマンドはGOTO にし、ジャンプした先でコマンドを実行させるよう設定する。そうしないと条件判断が真でコマンドを実行したあとで、つぎの行が実行されてしまう

■通常の設定

```
IF␣"%EDITOR%"=="VZ" CD¥VZ↲ ……………………①
IF␣NOT"%EDITOR%"=="VZ"␣CD¥MIF↲ ……………②
IF␣EXIST␣ATOK 8.DIC␣COPY␣ATOK 8.DIC␣F¥:↲ ……③
IF␣NOT␣EXIST␣ATOK 8.DIC␣COPY␣ATOK 7.DIC␣F¥:↲ ④
IF␣ERRORLEVEL␣2␣GOTO␣END↲ ……………………⑤
IF␣NOT␣ERRORLEVEL␣2␣GOTO␣END↲ ………………⑥
```

IF で は「=」は➡実際には「≦」として機能します。「=」と同じに機能させるためには「==」と指定します

■機能……………………………指定条件でのバッチ処理の分岐

IF 文は、設定された条件を判断してそれが真ならその後に書かれているコマンドを実行します。NOT がついている場合はその逆で条件が偽のときコマンドを実行します。

①は環境変数の EDITOR を参照して、それが VZ ならディレクトリを VZ に移動します。%で囲んで環境変数を参照することができます。

②は環境変数の EDITOR が VZ でなければディレクトリを MIF に移動します。

ここでは==の左右の文字列が等しいか等しくないかを判断しています。

③はカレントディレクトリに ATOK 8.DIC があれば、それをドライブ F にコピーします。

④はカレントディレクトリに ATOK 8.DIC がなければ ATOK 7.DIC をドライブ F にコピーします。

ここではEXISTの後ろに書かれたファイル名のファイルが存在するかどうかを調べます。

⑤はERRORLEVELを参照して、その値が2以上ならENDへ分岐します。

⑥は2以上でないときにENDに分岐します。

ここではERRORLEVELというシステム変数の値を参照しています。ERRORLEVELには、直前に実行されたコマンドが正常に終了したか異常に終了したかなどの実行結果が格納されます。正常に終了している場合は「0」が格納され、異常に終了した場合は「1」以上の値が格納されます。

しかし、普通バッチファイルではBATKEYコマンドなどを利用してERRORLEVELに0～9の値を格納させて分岐処理に使います。このとき注意が必要なのは、⑤のように書くと指定の数値以上かどうかで判断してしまいます。ですから、つぎのような分岐処理を作ると、常に1行めが実行されます。

←BATKEYについては64ページを参照してください



```
:BUNKI↵
BATKEY␣0␣1か2を入力してください↵
IF␣ERRORLEVEL=1␣GOTO␣MENU↵
IF␣ERRORLEVEL=2␣GOTO␣TARO↵
GOTO␣BUNKI↵
```

これを避けるには「==」を使えばいいわけですが、基本的にこの分岐処理を使うときは、大きい数字から比較します。つぎの例が通常作成するパターンです。

```
:BUNKI↵
BATKEY␣0␣1か2を入力してください↵
IF␣ERRORLEVEL==2␣GOTO␣TARO↵
IF␣ERRORLEVEL==1␣GOTO␣MENU↵
GOTO␣BUNKI↵
```

GOTO

内部コマンド



■クイックチェック

バッチファイル内でジャンプ処理ができる

■ポイント

IF と組み合わせて分岐処理に使う

■通常の設定

GOTO␣MENU↵

■機能……………………………指定されたラベル行へジャンプする

GOTO の後ろに書かれたラベル名の行へジャンプします。ラベルは半角で 8 文字までで指定します。実際のラベル行には頭に「：」がつきます。ラベル行も REM 文と同じく実行行ではないので、後ろにコメントを書いてもかまいません。

「：」の後の半角 8 文字以降は無視➡されます

FOR

内部コマンド



■クイックチェック

コマンドを繰り返して実行させられる

■ポイント

FOR 文のなかに FOR 文を書くことはできない

■通常の設定

FOR␣%%K␣IN␣(A:¥,B:¥,C:¥)␣DO␣CHKDSK␣%%K↵

■機能…………指定した項目に従ってコマンドを反復実行する

%%K は変数で、そこにカッコ内のパラメータが順次代入され、DO の後ろに書かれたコマンドが実行されます。この例では、A ドライブ→B ドライブ→C ドライブの順に、各ドライブにチェックディスクを実行します。

変数はバッチファイル内なら、%%＋アルファベット➡か数字 1 文字。コマンドラインから実行するときは、%はひとつです。ただし、FOR コマンドから FOR コマンドを実行することはできません

LOADHIGH(LH)　内部コマンド

■クイックチェック

常駐プログラムをUMB領域に組み込めるので、メインメモリの消費量を抑えられる

←CONFIG.SYSのDEVICEHIGHと同じ働きをします

■ポイント



UMBに空きがないときは、指定された常駐プログラムはメインメモリに組み込まれる

■通常の設定

```
LH␣DOSKEY↵
```

■機能 ……………………… 常駐プログラムをUMBへ組み込む

メモリ常駐プログラムをUMBにロードします。組み込めなかった場合はメインメモリに組み込みますが、メッセージ等は表示されません。そこでMEM.EXEなどを使って、UMBにちゃんとロードされているか確認しなくてはいけません。CONFIG.SYSのDEVICEHIGHと扱いは同じです。

LOADHIGHとフルネームで書かなくてもLHで動きます。

UMBを利用しますので、CPUは386以上でUMB利用のための3点セットがCONFIG.SYSに記述されている必要があります。

●UMB確保の3点セット



```
DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥EMM386.EXE␣/P=128␣
/UMB↵
DOS=HIGH,UMB↵
```

BATKEY 外部コマンド

■クイックチェック

> IF と組み合わせて、バッチ処理中にキー入力で分岐先を選ぶことに利用できる

■ポイント

> メッセージだけを表示するためには ECHO は OFF に設定

■通常の設定

おもに使うのはパラメータ 0 で、これを使うと簡単なメニュー用の分岐が作れます →

```
BATKEY␣0␣数字を入力してください↵ ……………①
BATKEY␣1␣Y か N を入力してください↵ …………②
BATKEY␣2␣なにかキーを押してください↵ ………③
```

■機能………………………………バッチ処理中のキー入力処理



指定されたメッセージを表示し、キー入力待ちの状態になります。キーが入力されると、設定にしたがい ERRORLEVEL に数値を格納します。

①パラメータが 0 のときは 0～9 の数字を受けつけ、入力した数字がそのまま ERRORLEVEL に格納します。

②パラメータが 1 のとき Y か N を受けつけ、Y ならば 1、N ならば 255 を ERRORLEVEL に格納します。

③パラメータが 2 のときはすべてのキーを受けつけ、押したキーの ASCII コードが 10 進数で ERRORLEVEL に格納します。

分岐する先が少ないときは、大きい数字の 9 から順にジャンプ先を「BUNKI」にします。 →
使えない数字が入力されると、キー入力状態に戻ります

```
:BUNKI↵
BATKEY␣0␣数字を選んでください。↵
IF␣ERRORLEVEL␣9␣GOTO␣9↵
IF␣ERRORLEVEL␣8␣GOTO␣8↵
IF␣ERRORLEVEL␣7␣GOTO␣7↵
IF␣ERRORLEVEL␣6␣GOTO␣6↵
IF␣ERRORLEVEL␣5␣GOTO␣5↵
IF␣ERRORLEVEL␣4␣GOTO␣4↵
IF␣ERRORLEVEL␣3␣GOTO␣3↵
IF␣ERRORLEVEL␣2␣GOTO␣2↵
IF␣ERRORLEVEL␣1␣GOTO␣1↵
IF␣ERRORLEVEL␣0␣GOTO␣0↵
```

ADDDRV

外部コマンド

■クイックチェック

CONFIG.SYS で指定しなくてもデバイスドライバをメモリに組み込むことができるので、日本語 FEP の切り替えなどに利用できる



■ポイント

ADDDRV は二度続けて実行することはできない。一度 DELDRV で取り外してから再び組み込む
CONFIG.SYS で組み込んだドライバについては、ADDDRV、DELDRV で操作することはできない

■通常の設定

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣ATOK 8.DEV↲
```

←ADDDRV は二度続けて実行することはできません。一度 DELDRV で取り外してから再び組み込みます

■機能……………………………デバイスドライバの組み込み

MS−DOS が起動してから、定義ファイルに指定されたデバイスドライバをメモリに組み込みます。ADDDRV で組み込んだデバイスドライバは DELDRV で取り外します。

ADDDRV 用の定義ファイルは、「DEVICE=…」か「DEVICEHIGH=…」だけが記述されたファイルです。つまり、組み込みたいデバイスドライバを列挙したものです。



ATOK 8 を例にあげれば、CONFIG.SYS のなかから DEVICE=の部分を抜き出すだけで、定義ファイルは作れます。

```
FILES=30↲
BUFFERS=20↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥EMS 386.SYS↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS/UCF=A:¥ATOK 8
¥ATOK 8.UCF↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 EX.SYS↲
```

下の 3 行だけを取り出して、ATOK 8.DEV とファイル名をつけてセーブ←します。
EMS 386.SYS はメモリドライバなので不用です。
ATOK 8 EX.SYS は DOS シェルを使わないのであれば設定する必要はありません

●デバイス定義ファイル……………………………ATOK 8.DEV

```
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS/UCF=A:¥ATOK 8
¥ATOK 8.UCF↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↲
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 EX.SYS↲
```

DELDRV

外部コマンド

CONFIG.SYS で組み込んだデバイスドライバを取り外すことはできません →



■クイックチェック

ADDDRV で組み込んだデバイスドライバを取り外す

■ポイント

ADDDRV は二度続けて実行できないので、新たなドライバを組み込むときは必ず DELDRV を実行する

■通常の設定 …………………………………………… DELDRV↵

■機能 ………… ADDDRV で組み込んだデバイスドライバの取り外し

ADDDRV で組み込んだデバイスドライバを取り外します。

DOSKEY

外部コマンド



■クイックチェック

メモリに常駐させると、コマンドラインのキー入力が楽になる

■ポイント

UMB が利用できるときは LH で UMB へロードします →

A：¥＞DOSKEY␣／R↵ ……………で常駐を解除できる

■通常の設定 …………………………………………… DOSKEY↵

■機能 ………………………………… コマンドライン入力時の支援

DOSKEY の主な機能です →

実行するとメモリに常駐して、以降のコマンドライン入力に便利なユーティリティとして働きます。

①ヒストリー機能：以前に実行したコマンドを呼び出す。

②コマンドラインの編集機能：コマンドライン上でカーソルキーが自由に使えるようになります。

③マルチステートメント機能：複数のコマンドを連続して実行が可能。コマンドの区切りは CTRL＋T を押します。

④コマンドのマクロ機能：スイッチをつけたコマンドを別の名前で登録できます。

PART 4

実践
AUTOEXEC.BAT & CONFIG.SYS

汎用 AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の作成ポイント

オタスケメモ（後→ろ見返し）に、PART 4 で作成するファイルを利用したメニューを紹介してあります。そのメニューを使うと、リセットすることなくいくつものアプリケーションソフトを使い分けられます

PART 4 は、アプリケーションソフト別の AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の作り方です。

本書は、ひとつの環境でアプリケーションソフトを切り替えて使えるようにするのが目的です。ですから、まずはじめに MS−DOS Ver.3.3 D と MS−DOS Ver.5.0 A を使った共通環境の AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS を作ります。これを「汎用型」と呼びます。その環境を使って、アプリケーションソフトを切り替えて使えるように設定を解説してあります。PART 4 で紹介している AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS を利用すると、アプリケーションソフトをどんどん切り替えて運用できるようになります。

それぞれのアプリケーションソフトのページでは、インストール時に作られる AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS をベースにしてより快適な設定を作成します。最近のアプリケーションソフトは、インストール時に AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替えを選べるものが多くなりました。選べる場合は「書き替えない」を選んでインストールします。

書き替えない場合、AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS のサンプルファイルがある場合とない場合があります。

サンプルファイルが作成される場合は、そのサンプルファイルとサンプルファイルが格納されるディレクトリを、作成されない場合は、フロッピーディスク内にあるファイルもしくはマニュアルにある参考ファイルを載せてあります。

なお本書では、アプリケーションソフトのインストール先は A ドライブのハードディスクとしていますが、ハードディスクの設定が違う場合は、それぞれの環境にあせて「A：￥」の部分のドライブ名を書き替えてご利用ください。またサブディレクトリ名の変更も環境にあわせて変更されて OK です。



AUTOEXEC.BAT と起動用バッチファイルの設定

つぎに、参考ファイルから実用的なファイルを作ります。AUTOEXEC.BAT はシステム環境設定用だけに使い、アプリ

ケーションソフトの起動用ファイルとしては使いません。それぞれのアプリケーションソフトの起動用バッチファイルは別に作ります。起動用のバッチファイルは、それぞれのアプリケーションソフトが入っているサブディレクトリに入れてください。PATH を設定すれば、ルートディレクトリからバッチファイル名を入力することで各アプリケーションソフトを起動できます。

← PATH ついては 52 ページを参照してください

CONFIG.SYS の設定



なるべく汎用型ですませるようになっていますが、ジャストウィンドウ環境の「一太郎 Ver.5」と「三四郎」、「PARADOX」は MS−DOS に付属しているメモリドライバでは満足に動かすことができませんので、別の環境を設定してあります。これらのアプリケーションソフトを使う場合は、一太郎 Ver.5 の設定を「汎用型」として使ってください。また、WindowsVer.3.1 も MS−DOS のメモリドライバは使っていますが、独自の環境で動作しますので、ほかのアプリケーションソフトと共通の環境で使い分けるときは、同様に一太郎 Ver.5 の設定を共通環境として使ってください。

← 78 ページを参照してください

日本語 FEP の設定



ひとつの環境でアプリケーションソフトを使い分ける場合には、日本語 FEP は、ADDDRV と DELDRV を使って「組み込み」「取り外し」ができるように設定したほうが便利です。アプリケーションソフトによっては対応してない日本語 FEP がありますし、マウスドライバを組み込んで使うこともあります。また、アプリケーションソフトにトラブルが起こったときは、日本語 FEP などの常駐プログラムを取り外し、動作確認をする必要があるので、簡単に取り外しができるようにしておいたほうが都合がいいのです。

いまはひとつの日本語 FEP しか使っていなくても、複数を使い分けたくなることもありますので、ADDDRV と DELDRV によって日本語 FEP を組み込むようにすることをおすすめします。ADDDRV で組み込むため、日本語 FEP の設定からデバイス定義ファイルを作ります。

日本語 FEP をひとつしか使わない場合は、CONFIG.SYS

の最後に日本語 FEP の記述をつけ加えます。

MS−DOS のバージョン

本書では、MS−DOS Ver.5.0 で使うことを基本にしていますが、MS−DOS Ver.3.3 でも MS−DOS Ver.5.0 固有の機能を除けば使うことができます。ただし、メモリ不足でアプリケーションが立ちあがらない場合もあります。特に MS−DOS Ver.3.3 で使うときに注意が必要な場合は、注意書きを記載しておきました。

ファイルの編集

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS ファイルを編集するには、エディタかワープロソフトが必要です。エディタかワープロがある場合は、それを利用してください。

PART 1 で使ったように、MS−DOS Ver.5.0 と MS−DOS Ver.3.3 ともにスクリーンエディタの SEDIT.EXE が付属しています。

PART 1 で作った→ディスクを利用しても OK です。このディスクに新しく作った定義ファイルやバッチファイルをサブディレクトリを作って保存するとエマージェンシーディスクとして使えます

このエディタは扱えるファイルの大きさに制限がありますが、AUTOEXEC.BAT や CONFIG.SYS くらいのファイルなら問題なく編集できます。AUTOEXEC.BAT や CONFIG.SYS は、ほとんど半角の英数字で設定するので、日本語 FEP を組み込む必要もありません。漢字を使ってコメントをつけたい場合は、あとからワープロソフトで編集するといいでしょう。

スクリーンエディタを利用する場合は、つぎのように入力すると起動することができます。なお、MS−DOS が A ドライブ（ハードディスク）のサブディレクトリ ¥DOS にインストールされている前提です。



このように、後ろ→に編集したいファイル名をフルパスでつけてコマンド入力をすればファイル編集がおこなえます

```
A:¥>A:¥DOS¥SEDIT␣A:¥TARO5.¥AUTOEXEC.SMP↵
```

メモリの配分

RAM ボードといえば、以前は 4 MB を増設するのが普通でした。よほど特殊なことをしなければこれで十分だったのですが、Windows というメモリ大食らいのアプリケーションソフ

トの出現とともに事情はずいぶん変わりました。

最新の 98 では、メモリははじめから 3.6 MB～5.6 MB 内蔵されていて、76 MB までも増設できるようになっています。一世代前までの機種では 14.6 MB が上限でしたが、実際のところ 8 MB～12 MB の増設が標準的な状況のようです。

この増設されたメモリを XMS、EMS、RAM ディスク、ディスクキャッシュにどう配分するかも、CONFIG.SYS 設定のポイントになります。現在のところ、この増設メモリを独自に使って動くのは Windows と一太郎 Ver.5 くらいです。つまり、これ以外のアプリケーションソフトは、なにかしらの設定をしてユーザーが RAM を活用できる余地があるわけです。

実際のメモリの配分は拡張メモリの量で変化しますので、4 MB、8 MB、12 MB 以上の 3 例を目安としてあげておきます。これを参考に、設定数値の部分は変更してください。あくまでも一般的な目安ですので、個々のアプリケーションソフトに特記事項がある場合はそちらを優先してください。MELWARE か MEMORY　SERVER II を使う場合は、XMS、EMS の区別はなく、すべて XMS＋EMS として確保され、アプリケーションソフトの要求によって XMS、EMS として配分されるようになっていますので、特に EMS を設定する必要はありません。

←システム立ちあげのときのメモリチェックで
640 KB＋××××KB
と表示されるメモリ量の
××××KB
をみてください



■拡張メモリのメモリ配分例

拡張メモリ	EMS	RAM ディスク	ディスクキャッシュ
4 MB	2048 KB	1280 KB	512 KB
8 MB	2048 KB	1536 KB	1024 KB
12 MB 以上	2048 KB	1536 KB	2048 KB

なお、ここにあげる設定例は、以下の環境で設定動作確認をおこなっています。

NEC　PC－9821 Ae＋12 MB 内部増設メモリ
NEC　PC－9801 VX＋4 MB 増設メモリ

VX は CPU を PK－X 486 S 50（アイ・オー・データ機器）で 486 に変更してあります。

OS MS−DOS Ver.3.3 D

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択不可

■ポイント

MS−DOS 3.3 D では、MS−DOS 5.0 A のように XMS の利用ができないので、使えるメモリはメインメモリと EMS だけ。デバイスドライバは EMS に対応していないとすべてメインメモリに組み込まれるため、あまり多くのデバイスドライバを組み込んでおくとアプリケーションソフトを起動するときにメモリ不足になる。そのため、必要以外のデバイスドライバは組み込まないようにする

メモリが不足しているとアプリケーションソフトが立ちあがらないか、立ちあがっても扱えるデータ量が少なくなったり一部の機能が使えなくなることもあります →

■インストール時に AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS のできるディレクトリ

A:¥ ……………………………………ルートディレクトリ

インストール時に作られる AUTOEXEC.BAT は、DOS に付属している MENU が立ちあがるように設定されます。本書では使用しないので削除します。

```
PATH␣A:¥DOS;A:¥↵
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↵
MENU↵
```

削除します →（MENU↵）



インストール時に作られる CONFIG.SYS は、各種のデバイスドライバを組み込みますが、不用なものは削除する必要があります。

```
DEVICE=A:¥DOS¥EMM 386.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥PRINT.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥RSDRV.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥NECAIK 1.DRV↵
DEVICE=A:¥DOS¥NECAIK 2.DRV␣A:NECAI.SYS↵
```

削除します →
削除します →
定義ファイルへ →
定義ファイルへ →

付属の日本語 FEP「NECAI 漢字変換」は、ADDDRV で利用できるように、CONFIG.SYS の設定は削除します。PRINT.SYS も利用するときは ADDDRV で組み込むようにします。

汎用型 AUTOEXEC.BAT

```
PROMPT␣$P$G↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS;↵
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↵
```

← 追加します



汎用型 CONFIG.SYS

```
FILES=20↵
BUFFERS=20↵
DEVICE=A:¥DOS¥EMM386.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥RAMDISK.SYS␣1536↵
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:
1024↵
```

← MS－DOS Ver.3.3 Dでは、メモリの消費を押さえるため、FILESは20に設定します

← 追加します

汎用型 AUTOEXEC.BAT と汎用型 CONFIG.SYS の基本設定は以上です。不用なデバイスドライバは、極力組み込まないようにします。RAM ディスクも、設定するとメインメモリがデバイスドライバの分減るので、必要な場合だけ設定します。

今後この汎用 AUTOEXEC.BAT と汎用 CONFIG.SYS に、使用するアプリケーションソフトの設定を追加して活用していきます。PATH にはハードディスク内に作った新たなサブディレクトリ名を追加します。

各アプリケーションソフトの AUTOEXEC.BAT や起動用バッチファイルのなかに SET で環境変数を設定する部分があったら、利用する場合必ず追加します。

日本語 FEP は使用するもののデバイス定義ファイルを作り、起動用バッチファイルのなかで ADDDRV で組み込むようにします。1種類の日本語 FEP しか使わない場合は、CONFIG.SYS のいちばん最後にデバイスドライバの記述を追加してください。

OS

MS−DOS Ver.5.0 A

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
⬇
選択不可

■ポイント

MS−DOS Ver.5.0 A では、XMS ドライバを利用して HMA、UMB、EMB を利用できるので、デバイスドライバを組み込んでもメインメモリが多量に消費されることはない。そのため余裕を持ってデバイスドライバの組み込みができる。MS−DOS Ver.5.0 A からは、ディスクキャッシュドライバも付属するようになったので、RAM ディスクとともに設定する。この2つを設定することで作業の高速化がはかれる

■インストール時に AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS のできるディレクトリ

A:¥ ……………………………………………ルートディレクトリ

インストール時に作られる AUTOEXEC.BAT は、MS−DOS 5.0 A に付属しているメニューソフトの DOSSHELL が起動するように設定されています。本書では使用しないので MOUSE とともに削除します。



```
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS↵
SET␣TEMP=A:¥DOS↵
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↵
MOUSE↵                    ← 削除します
DOSSHELL↵                 ← 削除します
MOUSE␣/R↵                 ← 削除します
```

インストール時の CONFIG.SYS は、各種のデバイスドライバが組み込まれるように設定されています。UMB に組み込むように設定されているのでメインメモリは圧迫しませんが、必要のないデバイスドライバは削除します。

付属の日本語 FEP「NECAI 漢字変換」は ADDDRV で利用できるように、CONFIG.SYS の設定は削除します →

```
FILES=30↵
SHELL=¥COMMAND.COM␣/P↵
DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS↵
```

```
DEVICE＝A：¥DOS¥EMM386.EXE␣／P＝416␣／UMB␣／T＝A：¥DOS¥EXTDSWAP.SYS↵
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥PRINT.SYS␣／U↵            ← 削除します
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥SMARTDRV.SYS␣2048␣128↵
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥RSDRV.SYS↵                 ← 削除します
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
DEVICE＝A：¥DOS¥NECAIK1.DRV↵                   ← 定義ファイルへ
DEVICE＝A：¥DOS¥NECAIK2.DRV↵A：NECAI.SYS↵      ← 定義ファイルへ
DOS＝HIGH,UMB↵
```

汎用型 AUTOEXEC.BAT

```
@ECHO␣OFF↵
PROMPT␣$P$G↵                                   ← 追加します
PATH␣A：¥；A：¥DOS；↵
SET␣TEMP＝A：¥DOS↵
SET␣DOSDIR＝A：¥DOS↵
```



汎用型 CONFIG.SYS

```
BUFFERS＝20↵
FILES＝30↵
SHELL＝A：¥COMMAND.COM␣A：¥␣／P␣／E：1024↵
DEVICE＝A：¥DOS¥HIMEM.SYS↵
DEVICE＝A：¥DOS¥EMM386.EXE␣／P＝128␣／UMB↵
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥SMARTDRV.SYS␣2048␣128↵
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥RAMDISK.SYS␣1536↵         ← 追加します
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
DOS＝HIGH,UMB↵
```



汎用型AUTOEXEC.BATと汎用型CONFIG.SYSの基本設定は以上です。この汎用AUTOEXEC.BATと汎用CONFIG.SYSに、使用するアプリケーションソフトの必要な設定を追加していきます。

Windows

Windows Ver.3.1

AUTOEXEC.
BAT と
CONFIG.SYS
の書き替え
↓
選択不可



ディスクキャッシュと RAM ディスクも設定してあれば、計算のなかに含めます。ただし、SMARTDRV は最小キャッシュサイズまではメモリを解放します

■ポイント

Windows Ver.3.1 は、MS－DOS アプリケーションソフトも含めて Windows 上で使用するように作られている。すべてのアプリケーションソフトを Windows 上で使うのであれば、Windows 用の設定を変更する必要はないが、MS－DOS アプリケーションソフトと切り替えて使う場合は工夫が必要になる。

共通の環境で使う場合は、EMS の設定量がポイントになる。Windows 上で MS－DOS アプリケーションソフトを使うときは、日本語 FEP などのために EMS を設定する。512 KB(P＝32)を設定すれば十分。MS－DOS アプリケーションソフトでは、もっと多くの設定が必要となる。そこで、「拡張メモリの総バイト数－EMS の設定値」を計算し、残りのバイト数が 3.6 MB を下まわらないように設定すればいい。メモリが不足した場合には Windows は起動しない。

MEMORY SERVERⅡや MELWARE では EMS と XMS をひとつのメモリドライバで管理しているので、この心配は無用。

ここにあげた例は、汎用の MS－DOSVer.5.0 A の設定を作ってから Windows をインストールしたもの

■インストール時に AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS ができるディレクトリ

A:¥ ……………………………………ルートディレクトリ

Windows をインストールするときに作られる下の AUTOEXEC.BAT には、Windows に付属の SMARTDRV が設定され、PATH が追加されるだけです。Windows を自動的に立ちあげたい場合は、最後に WIN という起動コマンドを追加します。

```
A:¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE↵
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥WINDOWS;A:¥DOS;A:¥↵
```

```
SET␣TEMP=A:¥DOS↲
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↲
```

インストール時に作られる下のCONFIG.SYSは、XMSとディスクキャッシュのドライバがWindows付属のものに変更され、SMARTDRVのダブルバッファリングが指定されています。ダブルバッファリングが不用ならSMARTDRVの行をCONFIG.SYSから削除します。

ダブルバッファリングとはAUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSの両方にディスクキャッシュが設定されている状態のことです。これは、一部のHDDで誤動作が起こるのを防ぐための処置。

```
FILES=30↲
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P↲
DEVICE=A:¥WINDOWS¥HIMEM.SYS↲
DEVICE=A:¥DOS¥EMM386.EXE␣/P=64↲
DEVICE = A : ¥ WINDOWS ¥ SMARTDRV . EXE ␣ /
DOUBLE_BUFFER↲
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥RAMDISK.SYS␣1536↲
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥KKCFUNC.SYS↲
DOS=HIGH,UMB↲
```

AUTOEXEC.BATでSMARTDRVが実行されたときに画面に表示がでるので「バッファリング」という項目がすべて「不用」という表示になっていたらCONFIG.SYSから削除します。

EMM386とKKCFUNCも、Windows上でDOS版の日本語FEPを使わなければ削除します

不用なら削除してください



●Windows 専用の AUTOEXEC.BAT

```
A:¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE↲
@ECHO␣OFF↲
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥WINDOWS↲
```

●Windows 専用の CONFIG.SYS

```
FILES=30↲
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P↲
DEVICE=A:¥WINDOWS¥HIMEM.SYS↲
DOS=HIGH↲
```

WindowsだけをうごかすのであればこれでOKです。環境変数領域の拡大も必要ありません。

●Windows 3.1 起動用バッチファイル …………………WIN31.BAT

起動用バッチファイルはサブディレクトリのA:¥WINDOWS内に置いてください

```
@ECHO␣OFF↲
A:¥WINDOWS¥WIN↲
```

ワープロ

一太郎 Ver.5

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
確認モードでインストールをしないと選択できません。自動モードでは自動的に書き替えられます。
一太郎 Ver.5 は、MS－DOS に付属している EMS ドライバが設定されている状態では起動できません



■ポイント

> 一太郎 5 とジャストウィンドウ環境だけを使うのであれば、自動インストールを選択し設定を変更する必要はない。
> ほかのアプリケーションソフトと共通の環境で使う場合は設定を変更するが、MS－DOS に付属しているメモリドライバでは日常の使用に耐える簡便な環境は設定できない。
> 共通環境の設定をするには MEMORY　SERVER II の使用を。
> また、RAM ディスクを利用すると動作を速くできる

■インストール時に AUTOEXEC.SMP と CONFIG.SMP ができるディレクトリ

```
A:¥TARO 5
```

インストール時に作られる下の AUTOEXEC.SMP は、環境変数の設定と PATH の設定をおこなっています。このはじめの 2 行は、共通環境を作るときには必ず設定します。DATE と TIME は必要なければ、入力が煩わしいですから削除してください。

```
SET␣JW 2 P=A:¥TARO 5;A:¥JW 2;↵
PATH␣A:¥JUST 5;↵
PROMPT␣$P$G↵
ECHO␣OFF↵
DATE↵
TIME↵
ECHO␣ON↵
```

インストール時に作られる CONFIG.SMP からは、ATOK 8 の設定を ADDDRV で組み込むようにするために抜き出します。

ATOK 8 のために EMS を設定する必要があります。そのため専用の EMS ドライバが付属しています →
定義ファイルへ →

```
FILES=30↵
BUFFERS=20↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥EMS 386.SYS↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
```

```
A：¥ATOK 8¥ATOK 8.UCF↵
DEVICE＝A：¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↵
DEVICE＝A：¥ATOK 8¥ATOK 8 EX.SYS↵
```

MEMORY SERVERⅡを使用した、一太郎 Ver.5 用 AUTOEXEC.BAT です。ほかのソフトと切り替えて使う場合は、下の AUTOEXEC.BAT を汎用型として使います。

```
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A：¥；A：¥DOS；A：¥JUST 5；A：¥MDEV¥
IOSPRO；↵
PROMPT␣$P$G↵
SET␣JW 2 P＝A：¥TARO 5；A：¥JW 2；↵
SET␣TEMP＝A：¥DOS↵
SET␣DOSDIR＝A：¥DOS↵
```

MEMORY SERVERⅡを使用した、一太郎 Ver.5 用 CONFIG.SYS です。この環境設定なら、Windows も MS－DOS アプリケーションソフトもともに動作させることができます。一太郎 Ver.5 をほかのアプリケーションソフトと切り替えて使う場合は、下の設定を汎用型 CONFIG.SYS として使います。

```
BUFFERS＝20↵
FILES＝30↵
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥VMM 386.EXE␣
／I␣／W＝CC␣／U␣／M↵↵
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣／
M␣／B＝1␣A：¥MDEV¥IOSPRO¥DC 10.EXE␣
2816␣／W＝2048↵
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣／
M␣／B＝1␣A：¥MDEV¥IOSPRO¥IOS 10.EXE
1408␣／X↵
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
SHELL＝A：¥COMMAND.COM␣A：¥␣／P␣／E：
1024↵
DOS＝HIGH,UMB↵
```

●起動用バッチファイル ……………………………TARO 5.BAT

```
A：¥DOS¥ADDDRV␣A：¥ATOK 8¥ATOK 8.DEV↵
A：¥JUST 5¥JXW↵
A：¥DOS¥DELDRV↵
```

←定義ファイルへ



MELWARE を使用しても結構です。汎用型の AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS に MEMORY SERVER Ⅱをオートインストールをして作った環境に、AUTOEXEC.SMP の SET と PATH の記述を追加します

一太郎を起動するためには XMS メモリは 3 MB 以上必要なので、拡張メモリが 4 MB の場合は RAM ディスクとディスクキャッシュの設定はしません。両方を実用的なメモリ量で設定をするには、拡張メモリが 8 MB 以上は必要です

起動用バッチファイルはサブディレクトリの A：¥JUST 5 に置いてください ATOK 8.DEV は 103 ページを参照してください

ワープロ

一太郎 Ver. 4

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
書き替えないを選ぶ と AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS は設定せず、HDD 内にサンプルファイルも作成しません。
サンプルファイルは保存用起動ディスクからコピーします。
一太郎 Ver.4 は EMS メモリを本体でも使うので必ず設定します。
RAM ディスクも作業領域用に設定します



■ポイント

一太郎 Ver.4 は、特に独自の設定というものはないので、汎用型の環境で問題なく動作する。一太郎 Ver.4 と ATOK 7 は EMS に対応しているので、EMS メモリが設定してないと、メモリ不足で起動しない場合もある。また、プログラム作業領域を設定できるので RAM ディスクを指定すれば動作を速くすることができる。日本語 FEP を使い分ける場合は、インストール時に ATOK 7 をルートディレクトリではなく「¥ATOK 7」というディレクトリを指定してインストールするようにする

■参考にする AUTOEXEC.HDD と CONFIG.HDD があるディレクトリ

保存用起動ディスク

参考にする AUTOEXEC.HDD のファイルのなかで重要なのは PATH の設定です。これは必ず設定します。

```
PATH␣A:¥;A:¥JSW;A:¥TARO 4;A:¥JSFONT;A:¥JSUT↵
PROMPT␣$P$G↵
ECHO␣OFF↵
DATE↵
TIME↵
ECHO␣ON↵
```

参考にする CONFIG.HDD のファイルのなかでは EMS を設定していませんが、必ず設定します。ATOK 7 の設定は ADDDRV で組み込むための定義ファイルに抜き出します。

```
FILES=20↵
BUFFERS=10↵
DEVICE=ATOK 7 A.SYS␣/D=A:¥ATOK 7 L.DIC␣/G=A:¥JSFONT¥JFGAIJ.UFO↵
DEVICE=ATOK 7 B.SYS↵
```

定義ファイルへ →
定義ファイルへ →

下のファイルが一太郎 Ver.4 用の AUTOEXEC.BAT です。単独で使うならこのままで、ほかのソフトと切り替えて使う場合はアンダーラインの部分を、汎用型 AUTOEXEC.BAT に追加してください。

```
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥JSW;A:¥TARO 4;
A:¥JSFONT;A:¥JSUT↲
PROMPT␣$P$G↲
```



CONFIG.SYS は汎用型をそのまま使います。特に追加するものはありません。

●起動用バッチファイル ……………………………TARO 4.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥ATOK 7¥ATOK 7.DEV↲
CD␣¥JSW↲
JXW↲
CD␣¥↲
A:¥DOS¥DELDRV↲
```

←起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥JSW に置いてください ATOK 7.DEV は 105 ページを参照してください

EMS と RAM ディスクを活用するには、「オプション」で「環境設定(JW)」で、データ作業領域の EMS を 2048 KB に設定してファイルは「使わない」を選びます。プログラム作業領域は 640 KB を指定してディレクトリは RAM ディスクのドライブ名を指定します。

この設定をしないと EMS と RAM ディスクが利用できません。これで動作を速くすることができます

一太郎 Ver.5 が重すぎると思っている方は、ATOK 8 を Ver.4 で使うこともできます。日本語 FEP の ATOK 8 の 103 ページを参照してください。メニューから「オプション」の「ファイル設定(JW)」を選び、辞書、外字、半角外字のファイル名を ATOK 8 用に書き替えないと辞書を認識しませんので、ATOK 8 を使うことができません。

辞書	[A:¥ATOK 8¥ATOK 8.DIC]
外字	[A:¥JW 2¥FONT¥JFGAIJ.UFO]
半角外字	[A:¥JW 2¥FONT¥JFHGAIJ.UFO]

ワープロ 松 Ver.6

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
CONFIG.SYS の書き替えは選べますが、書き替えをしないを選ぶと CONFIG.SYS の設定はしません

■ポイント

松はインストール時にはメモリに対する設定は特におこなわない。EMS に対応しているので EMS が設定してあれば、松茸が EMS メモリに組み込まれ、メインメモリの消費量が抑えられる。汎用型の環境設定で動く。
松茸の環境設定は SETMTTK.EXE を起動することでできる。松に付属している Ver 3.7 では強制的に CONFIG.SYS を書き替えてしまう。ADDDRV を使用するときは、松茸の環境設定後、CONFIG.SYS から変更部分を MTTK 3.DEV に書き出し、CONFIG.SYS から松茸の設定を削除する必要がある

■インストール時に起動用バッチファイルのできるディレクトリ

A:¥MATUV6

インストール時に、起動用のバッチファイル MATU.BAT ができます。エラー処理の部分は特に必要はないでしょう。専用のマウスドライバを起動させていますので、マウスを使う場合は、これは残しておきます。



```
ECHO␣OFF↵
CD␣¥MATUV6↵
IF␣NOT␣EXIST␣MATU6.EXE␣GOTO␣ERROR↵      削除します →
IF␣NOT␣EXIST␣MATU6.OVL␣GOTO␣ERROR↵      削除します →
MOUSEK↵
MATU␣%1␣%2␣%3␣%4␣%5␣%6␣%7␣%8␣%9↵
MOUSEK␣x↵
CD␣¥↵
GOTO␣END↵                                削除します →
:ERROR↵                                  削除します →
ECHO␣＊＊＊␣松のシステムがみつかりません␣＊＊＊↵      削除します →
ECHO␣＊＊＊␣カレントドライブをハードディスクに移して    削除します →
から実行してください␣＊＊＊↵                削除します →
CD␣¥↵                                    削除します →
:END↵                                    削除します →
```

インストール時にはCONFIG.SYSは作られないので、フロッピーディスクのシステム1から抜き出しました。松茸の設定部分はADDDRVで組み込めるように定義ファイルにします。



```
files␣=␣20↵
buffers␣=␣10↵
device␣=␣b:¥mttk3a.drv␣a:¥␣/n↵
device␣=␣b:¥mttk3b.drv↵
device␣=␣b:¥mcode.drv↵
```

←定義ファイルへ
←定義ファイルへ
←定義ファイルへ

下のファイルが松6用AUTOEXEC.BATです。ほかのアプリケーションソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を汎用型AUTOEXEC.BATに追加します。

```
ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥MATUV6;↵
PROMPT␣$P$G↵
```

CONFIG.SYSは汎用型をそのまま使います。特に追加する設定はありません。

●起動用バッチファイル ………………………………MATU 6.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥MTTK3¥MTTK3.DEV↵
CD␣¥MATUV6↵
MOUSEK↵
MATU↵
MOUSEK␣x↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
CD␣¥↵
```

←起動用バッチファイルはサブディレクトリの
A:¥MATUV 6
に置いてください
MTTK 3.DEV
は106ページを参照してください

ワープロ

New オーロラエース

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
KATANA 4 を CONFIG.SYS に 組み込むのか、ADDDRV で組み込むのかを選択できます。
AUTOEXEC.BAT は書き替えません



KKCSAV.SYS は MS－DOS Ver.5 に対応していない日本語 FEP を組み込むときに必要なデバイスドライバです。
Ninja 5 に付属しているフルセット版と比べると、オーロラエース版には MS－DOS Ver.5 対応の KATANA 4 が付属していませんので、組み込みが必要になります →

■ポイント

オーロラエースは EMS と XMS に対応しているが、自動判別して使うので特に設定の必要はない。汎用型の設定で動作可能。環境設定で作業ディレクトリが指定できるので、RAM ディスクを指定すれば動作を速くすることができる。日本語 FEP の KATANA 4 は、EMS に組み込まれるように設定されている。なお、KATANA 4 の環境設定用プログラムは付属していない。フルセット版を購入すると付属している

■インストール時に起動用バッチファイルのできるディレクトリ

```
A:¥AKPRO
```

インストール時にできる起動用バッチファイルが下の AKPRO.BAT です。タイトル画面の表示は別プログラムになっているので、TITLE を削除すれば、すぐにプログラム本体が起動します。パスや作業ディレクトリの指定はソフト内の環境設定で指定します。

```
ECHO␣OFF↵
CLS↵
TITLE↵
AURORA↵
```

下がインストール時にできる ADDDRV 用定義ファイルの KTN 4.DVC です。オーロラエース付属の KATANA 4 を MS－DOS Ver.5 で使用するには、KKCFUNC.SYS と KKCSAV.SYS を組み込む必要がありますが、定義ファイルには書かれてないので追加します。KKCSAV.SYS は定義ファイルで組み込みます。

```
DEVICE␣=␣A:¥KTN 4¥KTN 4.SYS␣/F=A:¥
KTN 4¥KTN 4.CFG↵
DEVICE␣=␣A:¥KTN 4¥KTN 4 C.SYS␣/F=A:
¥KTN 4¥KTN 4.CFG/DA:¥KTN 4¥KTNSMALL.
DIC,A:¥KTN 4¥USR.DIC↵
```

NEW オーロラエース用 AUTOEXEC.BAT です。ほかのソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を汎用型に追加します。



```
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥DOS;A:¥;A:¥AKPRO;↵
PROMPT␣$P$G↵
```

← 追加します

CONFIG.SYS は汎用型をそのまま使います。特に追加する設定はありません。

●起動用バッチファイル……………………………………AKPRO.BAT

← 起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥AKPRO に置いてください KATANA 4 OA.DEV は 108 ページを参照してください

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥KTN 4¥KATANA 4 OA.
DEV↵
ECHO␣OFF↵
CD␣¥AKPRO↵
CLS↵
TITLE↵
AURORA↵
CD␣¥↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

起動後、環境設定を選び各種環境を設定します。そのとき、作業ディレクトリは RAM ディスクを設定しますが、ルートディレクトリは指定できません。

```
F:¥TMP
```

このように、RAM ディスクのドライブ名にディレクトリ名をつけて設定します。

統合 MS－WORKS Ver 3.1

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
⬇
選択可

⇧
書き替えないを選べば現在の設定に MS－WORKS 用の設定を追加した形で参考例をルートディレクトリにつくります

■ポイント

MS－WORKS 本体と付属の日本語 FEP は、ともに EMS に対応しているので、EMS が設定されていれば日本語 FEP は EMS に組み込まれ、表計算でも大きなシートが扱えるようになる。汎用型の設定で動作する

■インストール時に AUTOEXEC.WK 3 と CONFIG.WK 3 ができるディレクトリ

A:¥ ……………………………………………ルートディレクトリ

インストール時にできる下の AUTOEXEC.WK 3 は、PATH の追加と COMSPEC の設定をしています。

```
@ECHO␣OFF↵
PROMPT␣$P$G↵
PATH␣A:¥DOS;A:¥;A:¥WORKS;↵
SET␣COMSPEC=A:¥COMMAND.COME↵
```

COMSPEC は CONFIG.SYS の「SHELL＝」で指定しますので必要ありません →

インストール時にできる下の CONFIG.WK 3 は、既存の CONFIG.SYS に WX II ＋forMS の組み込みが追加されるだけです。これは、ADDDRV で組み込むように定義ファイルにします。



```
BUFFERS=20↵
FILES=30↵
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:1024↵
DEVICE=A:¥WORKS¥WXK.SYS␣/A3↵
DEVICE=A:¥WORKS¥WX2.SYS␣/DA:¥WORKS¥WX2.DIC␣/A3␣↵
```

定義ファイルへ →
定義ファイルへ →

インストール時にできる起動用バッチファイル WORKS 31.BAT では、マウスの組み込みと、ATOK 7、ATOK 6 用のユーティリティプログラム MSKN.EXE の組み込みをチェックしています。マウスは必ず組み込むようにします。

```
    IF␣EXIST␣A:¥WORKS¥MSKN.EXE␣A:¥
    WORKS¥MSKN␣↲
    IF␣NOT␣EXIST␣A:¥WORKS¥MOUSE.COM␣
    GOTO␣NOMOUSE↲
    A:¥WORKS¥MOUSE↲
    IF␣ERRORLEVEL␣1␣GOTO␣NOMOUSE↲
:MOUSE↲
    A:↲
    CD␣¥WORKS↲
    WORKS␣%1␣%2␣%3␣%4␣%5␣%6␣%7␣%8␣%9↲
    A:¥WORKS¥MOUSE␣OFF↲
    GOTO␣END↲
:NOMOUSE↲
    A:↲
    CD␣¥WORKS↲
    A:¥WORKS¥WORKS␣%1␣%2␣%3␣%4␣%5␣%6
    ␣%7␣%8␣%9↲
    GOTO␣END↲
:END↲
    IF␣EXIST␣A:¥WORKS¥MSKN.EXE␣A:¥
    WORKS¥MSKN␣OFF↲
```

← MSKN は ATOK 6、7 を WORKS で使うときには必ず組み込む必要があります。

インストール時に ATOK 6、7 がハードディスク内にあるときは、WORKS のディレクトリにコピーされますが、あとから日本語 FEP を ATOK 6、7 に変更する場合は改めてフロッピーディスクからコピーしなくてはいけません。

逆に ATOK 6、7 の使用をやめるときは MS−WORKS のディレクトリ内から削除する必要があります

MS−WORKS Ver.3.1 用 AUTOEXEC.BAT です。ほかのソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を汎用型に追加します。

```
@ECHO␣OFF↲
PROMPT␣$P$G↲
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥WORKS;↲
```

CONFIG.SYS は汎用型をそのまま使います。特に追加する設定はありません。

起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥WORKS に置いてください

●起動用バッチファイル ……………………………………WK 31.BAT

```
A:¥ADDDRV␣A:¥WX 2¥WX 2 MS.DEV↲
CD␣¥WORKS↲
A:¥WORKS¥MSKN↲
A:¥WORKS¥MOUSE↲
WORKS↲
A:¥WORKS¥MOUSE␣OFF↲
CD␣¥↲
A:¥DOS¥DELDRV↲
```

WX 2 MS.DEV ← は 109 ページを参照してください

← ATOK 6、7 を使用しないときは、MSKN の行は削除します



表計算

Lotus 1-2-3

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択不可

⇧
Lotus 1-2-3 は AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の設定はしません。インストール前に自分で設定する必要があります



■ポイント

EMS に対応しているので、EMS が設定されていると大きなワークシートが扱える。注意が必要なのは日本語 FEP の設定。日本語 FEP は ATOK 6、ATOK 7、NECDIC、VJE－β、松茸にしか対応していないので、これ以外の日本語 FEP を組み込んで起動するとエラーになる。日本語 FEP を変更した場合には、環境設定の変更も必要となる

■参考用 AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS のあるディレクトリ

マニュアル

下のファイルは、マニュアルに参考として書いてある AUTOEXEC.BAT です。起動コマンドだけで特になにも指定してありません。

```
CD␣LOTUS↵
LOTUS↵
```

下のファイルは、マニュアルに参考として書いてある CONFIG.SYS です。EMS の設定とマウスを組み込んでいます。Lotus 1-2-3 では、MOUSE.COM は使えませんので、マウスを使う場合は MOUSE.SYS を組み込みます。

```
FILES=20↵
BUFFERS=12↵
DEVICE=A:¥DOS¥EMM386.SYS␣F=C000↵
DEVICE=A:¥ATOK7A.SYS␣/D=A:¥ATOK7
L.DIC↵
DEVICE=A:¥ATOK7B.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥MOUSE.SYS↵
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:
256↵
```

Lotus 1-2-3 は EMS があると、→ 扱えるワークシートが大きくなります。
ただし、環境設定のメモリの設定で「拡張メモリのみ」を選ばないとより大きなワークシートは使えません

Lotus 1-2-3 用の AUTOEXEC.BAT です。単独で使うならこのままで OK、ほかのソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を汎用型 AUTOEXEC.BAT に追加してください。

```
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥LOTUS;↵
PROMPT␣$P$G↵
```

CONFIG.SYS は汎用型をそのまま使います。特に追加するものはありません。

●起動用バッチファイル ……………………………………123.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥ATOK 8¥ATOK 8.DEV↵
A:¥JUST 5¥8 TO 6.COM↵
CD␣¥LOTUS↵
LOTUS↵
A:¥JUST 5¥8 TO 6.COM␣/R↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
CD␣¥↵
```

起動用バッチファイルはサブディレクトりの A:¥LOTUS に置いてください

← ATOK 8.DEV は 103 ページを参照してください

← 103 ページの ATOK 8_7.DEV や ATOK 8_7 M.DEV を使って、ATOK 8 を ATOK 7 として使う場合は 8 TO 6.COM の行は必要ありません



日本語 FEP は、一太郎 Ver.5 の ATOK 8 を使う方法を例としてあげます。ATOK 8 は一太郎 Ver.4 のところで書いたように ATOK 7 としても使えますが、ここでは ATOK 8 付属の 8 TO 6.COM を利用して ATOK 6 として使います。これでしたら ADDDRV 用の定義ファイルは ATOK 8 用ひとつで済みますし、ATOK 8 を CONFIG.SYS で組み込んでいる場合でも使えます。

マウスを使う場合は、デバイス定義ファイルに MOUSE.SYS を組み込んで使うようにします。

●定義ファイルにマウスドライバを組み込んだ例

……………………ATOK 8_7 M.DEV

← 104 ページを参照してください

```
DEVICE=B:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
B:¥ATOK 8¥ATOK 7.UCF↵
DEVICE=B:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥MOUSE.SYS↵
```

表計算

三四郎

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
書き替えないを選びますが、確認モードでインストールしないを選ぶことはできません。自動モードでは自動的に書き替えられてしまいます



■ポイント

> 一太郎 Ver.5 と同様に、ジャストウィンドウ環境だけを使うのであれば、自動インストールを選択し設定を変更する必要はない。ほかのアプリケーションソフトと共通の環境で使う場合は、MEMORY SERVER II を使った一太郎 Ver.5(78 ページ)のところに書いてある環境設定を使う

■インストール時に AUTOEXEC.SMP と CONFIG.SMP ができるディレクトリ

```
A:¥SANSIRO
```

インストール時に作られる AUTOEXEC.SMP は、環境変数の設定と PATH の設定をおこなっています。下のはじめの 2 行は、共通環境を作るときには必ず設定します。

```
SET␣JW2P=A:¥SANSIRO;A:¥JW2;↵
PATH␣A:¥JUST5;↵
PROMPT␣$P$G↵
ECHO␣OFF↵
DATE↵
TIME↵
ECHO␣ON↵
```

インストール時に作られる CONFIG.SMP からは、ATOK 8 の設定を ADDDRV で組み込むようにするために抜き出します。

```
FILES=30↵
BUFFERS=20↵
DEVICE=A:¥ATOK8¥EMS386.SYS↵
DEVICE=A:¥ATOK8¥ATOK8A.SYS␣/UCF=
A:¥ATOK8¥ATOK8.UCF↵
DEVICE=A:¥ATOK8¥ATOK8B.SYS↵
DEVICE=A:¥ATOK8¥ATOK8EX.SYS↵
```

定義ファイルへ →
定義ファイルへ →

下のファイルが三四郎用のAUTOEXEC.BATです。ほかのソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を一太郎Ver.5用AUTOEXEC.BATに追加します。



```
SET␣JW2P=A:¥SANSIRO;A:¥JW2;↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥JUST5;A:¥MDEV¥
IOSPRO;↵
PROMPT␣$P$G↵
```

CONFIG.SYSは、一太郎Ver.5用CONFIG.SYSを使います。この環境設定なら、WindowsもMS−DOSアプリケーションソフトもともに動作させることができます。

●起動用バッチファイル ……………………………SANSIRO.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣ATOK8.DEV↵
A:¥JUST5¥SAN↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

← 起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥JUST 5 に置いてください ATOK 8.DEV は 103 ページを参照してください

基本的には一太郎Ver.5と同じです。どちらかといえば、単独で三四郎を買うより、「JW2ユーザーズキット」を買って一太郎といっしょに使う人のほうが多いのではないでしょうか。ユーザーズキットでインストールをした場合、三四郎のPATHを追加するだけですので、一太郎を立ちあげてそのなかから三四郎を立ちあげることになります。両方を使う場合は、ジャストウィンドウを立ちあげるように設定したほうが使いやすいでしょう。

●ジャストウインドウ起動用バッチファイル ………JWIN.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣ATOK8.DEV↵
A:¥JUST5¥JW↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

← 起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥JUST 5 に置いてください ATOK 8.DEV は 103 ページを参照してください

カード型データベース NINJA 5

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
KATANA 4 の組み込み方法を CONFIG.SYS か ADDDRV のどちらかを選べますので ADDDRV を選びます。
すると KATANA 4 用の定義ファイル KTN 4 D 5.DVC が作られます。CONFIG.SYS の設定はしないので自分でする必要があります。

KATANA 4 は MS−DOS Ver.3.3 D と MS−DOS Ver.5.0 A.では、使用するファイルが違いますので、MS−DOS Ver.5.0 A.用に作ったシステムを MS−DOS Ver.3.3 D 用に転用することはできません。注意が必要です

■ポイント

EMS、XMS に対応しているが、特に設定は必要ない。自動的に対応してくれるので、汎用型の設定で動く。データベースソフトは検索や並べ替えをよく使うので、RAM ディスクを作業ディレクトリに指定すると作業が高速化できる。KATANA 4 は環境設定で EMS、XMS に組み込み先を指定できる

■インストール時に起動用バッチファイルができるディレクトリ

```
A:¥NINJA 5
```

下のファイルがインストール時にできる起動用バッチファイル NJ 5.BAT です。ADDDRV で組み込みを指定したので、バッチファイルにはその設定が反映されています。

```
@ECHO␣OFF↵
ADDDRV␣KTN 4 D 5.DVC↵
CLS↵
TITLE↵
NINJA↵
DELDRV↵
```

下のファイルがインストール時に作られる定義ファイル KTN 4 D 5.DVC です。定義ファイルのファイル名は拡張子を DEV に統一するために KTN 4 D 5.DEV にリネームします。

```
DEVICE␣=␣A:¥KTN 4¥KTN 4 D 5.SYS␣/E/
AS 32/AE 0/AX 0/AGN↵
DEVICE␣=␣A:¥KTN 4¥KTN 4 CD 5.SYS␣/E
/H/DA:¥KTN 4¥KTN.DIC,A:¥KTN 4¥USR.
DIC/I 111221/M 3111/J 11/C 5 CEDM/Z
22222221/O 11↵
```

NINJA 5 用の AUTOEXEC.BAT です。単独で使うならこのまま、ほかのソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を汎用型 AUTOEXEC.BAT に追加してください。



```
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥NINJA5;↵
PROMPT␣$P$G↵
```

CONFIG.SYS は汎用型をそのまま使います。特に追加するものはありません。

●起動用バッチファイル……………………………………NJ 5.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥KATANA4¥KTN4D5.
DEV↵
CD␣¥NINJA5↵
CLS↵
TITLE↵
NINJA↵
CD␣¥↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

← 起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥NINJA 5 に置いてください KTN 4 D 5.DEV は 107 ページを参照してください

RAM ディスクを活用するには、環境設定を選び、ドライブパスの「作業」を RAM ディスクに設定します。ただし、ルートディレクトリは設定できません。

```
F:¥TMP
```

← RAM ドライブが G であれば G とします。ご使用の環境にあわせてください

このようにドライブ名にディレクトリ名もつけて設定します。ディレクトリ TMP は、指定しておけば自動的に作られます。この設定をするとソートや検索が高速になります。

リレーショナルデータベース PARADOX for DOS 4.0 J

AUTOEXEC. BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
インストールプログラムは、インストール先のドライブは選べるのですが、CONFIG.SYS の書き替えは A ドライブに固定されているので、B ドライブにインストールしたい人は書き替えてもらいたくてもしてくれません

■ポイント

PARADOX も一太郎 Ver.5 と同じように、MS−DOS 付属の EMS ドライバが設定されていると起動できない。
マニュアルには書かれてないが、README ファイルには動作環境について詳しい記述がある。それによると、EMM 386. SYS、EMM 386.EXE は使用できない。また、NEC の MS−DOS 5.0 A 付属の DPMI.EXE では動作しないとのこと。EMS が使いたいときには MEMORY SERVER II か MELWARE を使うように指示されている。
ほかのアプリケーションソフトと切り替えて使うときは、一太郎 Ver.5 の環境設定を使用する。単独で使う場合でも、日本語 FEP を組み込まなければ、漢字が使えないので、同じ環境を設定する

■参考用 AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS のあるディレクトリ

マニュアル

下のファイルはマニュアルに参考として書いてある起動手順です。起動コマンドだけで特になにも指定してありません。

```
CD␣PDOX 40↵
PARADOX↵
```

下のファイルはマニュアルに参考として書いてある CONFIG.SYS の設定です。PARADOX は FILES、BUFFERS をともに 40 以上に設定しないと起動できません。

```
BUFFERS=40↵
FILES=40↵
```

PARADOX 用 AUTOEXEC.BAT です。ほかのソフトと切り替えて使う場合は、アンダーラインの部分を一太郎 Ver.5 用 AUTOEXEC.BAT に追加します。

```
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥PDOX 40;A:¥MDEV
¥IOSPRO;↵
PROMPT␣$P$G↵
```

← MEMORY SERVER IIは、DPMI 用のドライバ DPMI 32.EXE を AUTOEXEC.BAT の先頭で組み込むようになっています。
しかし、PARADOX で使うときは、このドライバは組み込まないほうがいいようです。
組み込んであると、動作中に異常終了することがあります



CONFIG.SYS は、一太郎 Ver.5 用 CONFIG.SYS を使いますが、FILES と BUFFERS は 40 に設定します。

```
BUFFERS=40↵
FILES=40↵
DEVICE=A:¥MDEV¥IOSPRO¥VMM 386.EXE␣
/I␣/W=CC␣/U␣/M↵
DEVICE=A:¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣/
M␣/B=1␣A:¥MDEV¥IOSPRO¥DC 10.EXE␣
2816␣/W=2048↵
DEVICE=A:¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣/
M␣/B=1␣A:¥MDEV¥IOSPRO¥IOS 10.EXE␣
1408␣/X↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:
1024↵
DOS=HIGH,UMB↵
```

●起動用バッチファイル ……………………………………PARA.BAT

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥WX 2¥WX 2.DEV↵
CD␣PDOX 40↵
PARADOX↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

← 起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥PDOX 40 に置いてください
WX 2.DEV は 101 ページを参照してください

起動ファイルでは、日本語 FEP は WXII＋を使っていますが、これは別の日本語 FEP を指定しても OK です。マウスのドライバは PARADOX が内蔵しているので、マウスドライバを設定しなくてもマウスは使えます。

メモリ管理 MEMORY SERVER II

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択不可

⇧
自動的に AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS を書き替えます。ただし、書き替えるファイルを別のドライブやサブディレクトリのなかにある AUTOEXEC.BAT や CONFIG.SYS から選択することはできます



■ポイント

98用では唯一市販されているメモリドライバ。アイ・オー・データ機器のメモリボードにも添付されている。EMS、XMS、VCPIの3規格にひとつのドライバで対応しているので、WindowsVer.3.1と一太郎Ver.5をひとつの環境設定で使うことができる。メモリはアプリケーションソフトの要求に応じてEMSとしてもXMSとしてもどちらでも供給されるので、EMSの設定量を考える必要がない。MS-DOSVer.3.3でも、このメモリドライバを使うとUMBが利用できるようになるので、デバイスドライバの組み込みによるメインメモリの減少を防げる。これはぜひ使いたいメモリドライバだ。フルオートインストールがかなり高い完成度なので、これを選択してインストールする

■インストール時にAUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSができるディレクトリ

A:¥ ……………………………………………ルートディレクトリ

下のファイルはインストール時のAUTOEXEC.BATです。DPMI用のドライバが設定されPATHが追加されます。DPMI 32.EXEは、特に設定する必要はないので削除します。

```
A:¥MDEV¥IOSPRO¥DPMI 32.EXE↵
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥MDEV¥IOSPRO;A:¥DOS;A:¥↵
SET␣TEMP=A:¥DOS↵
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↵
```

下のファイルはインストール時のCONFIG.SYSでは、メモリドライバ以外にもディスクキャッシュとRAMドライブのデバイスドライバが付属のものに変更されます。

```
DEVICE=A:¥MDEV¥IOSPRO¥VMM 386.EXE␣
/W=CC␣/I␣/U↵
DEVICE = A : ¥MDEV¥IOSPRO¥DC 10.EXE␣
```

```
2816␣／W＝2048↲
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥IOS 10.EXE␣
1408␣／X↲
BUFFERS＝20↲
FILES＝30↲
SHELL＝A：¥COMMAND.COM␣A：¥␣／P␣／E：
1024↲
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↲
DOS＝HIGH,UMB↲
```

← ディスクキャッシュと RAM ドライブの設定値を変更したい場合は、カスタムインストールを選択してインストールをします

この設定は、MS−DOS Ver.5.0 の汎用型にフルオートインストールを実行したものです。一度フルオートインストールをしたあとで、付属の UMB 最適化プログラム「OPTUMB」を実行して UMB 領域の確保とデバイスドライバの UMB 領域へのロードを設定します。

MEMORY SERVERⅡを使った MS−DOS Ver.5.0 の汎用型 AUTOEXEC.BAT です。

```
@ECHO␣OFF↲
PATH␣A：¥；A：¥DOS；A：¥MDEV¥IOSPRO；↲
SET␣TEMP＝A：¥DOS↲
SET␣DOSDIR＝A：¥DOS↲
```



「OPTUMB」を使って UMB を最大限利用できる、MS−DOS Ver.5.0 の汎用型 CONFIG.SYS です。

```
BUFFERS＝20↲
FILES＝30↲
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥VMM 386.EXE␣
／I␣／W＝CC␣／U＝D 0−DF,E 9−F 0␣／M＝D 8：
16−F 1；DC：8−A 5␣／NECID↲
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣／
M␣／B＝1␣A：¥MDEV¥IOSPRO¥DC 10.EXE␣
2816␣／W＝2048↲
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣／
M␣／B＝1␣A：¥MDEV¥IOSPRO¥IOS 10.EXE␣
1408␣／X↲
SHELL＝A：¥COMMAND.COM␣A：¥␣／P␣／E：
1024↲
DEVICE＝A：¥MDEV¥IOSPRO¥LUMB.EXE␣／
M␣／B＝1␣A：¥DOS¥KKCFUNC.SYS↲
DOS＝HIGH,UMB↲
```

← ハードディスクの BIOS も移動できるので連続した大きな UMB 領域を確保できます。デバイスドライバは UMB に組み込みましたが、まだ余っています

メモリ管理

MELWARE Ver.5

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
⬇
選択不可

⇧
自動的に AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS を書き替えます。
書き替えるファイルを選択することはできます



■ポイント

市販はされていないが、メルコのメモリボードに付属しているメモリドライバ。MEMORY SERVERIIと同様に、ひとつのメモリドライバで、EMS、XMS、VCPIの3つのメモリ規格に対応している。ひとつの環境でWindows Ver.3.1と一太郎Ver.5、そしてほかのMS−DOSアプリケーションソフトを使い分けることができる。EMSとXMSはアプリケーションソフトの要求に応じて割り振られるので、EMSの量を設定する必要はない。メルコ製のメモリボードを使用している方は、MS−DOS付属のメモリドライバの使用をやめてMELWAREを使うことをおすすめする

MS−DOS Ver.5.0の汎用型AUTOEXEC.BATにインストールしたものですが、なにも変更はされていません。

```
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS;↵
SET␣TEMP=A:¥DOS↵
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↵
```

MS−DOS Ver.5.0の汎用型CONFIG.SYSにインストールしたものですが、メモリドライバが設定されディスクキャッシュのドライバが付属のものに変更されています。

```
BUFFERS=20↵
FILES=30↵
DEVICE=MELEMM.386␣/HM␣/M␣D 0,D 4↵
DEVICEHIGH=XMSCACHE.EXE␣2560↵
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:
1024↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
DOS␣=␣HIGH,UMB↵
```

MELWAREはドライバをルートディレクトリにインストールするので、きちんと整理したい場合は、サブディレクトリを作ってファイルを移動させる必要があります →

通信

まいとーく Ver 2.1

■ポイント

メモリドライバなど特に必要な設定はないので、汎用型の設定で動作する。通信で漢字を使うために、日本語 FEP の設定が必要になる。付属のインストールプログラムは、デフォルトだとルートディレクトリにインストールするようになっているので、インストール先のディレクトリを指定してサブディレクトリにインストールするようにする。サブディレクトリ名は MYTALK でいいだろう

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択不可

⇧
書き替えはしません。ルートディレクトリに起動用のバッチファイルができます



インストール時にできる起動用バッチファイル MYTALK.BAT です。サブディレクトリを指定してインストールしたので、それが反映されています。

```
echo␣off↵
cd␣¥MYTALK↵
MYTALK↵
cd␣¥↵
echo␣on↵
```

●起動用バッチファイル ……………………………MYTALK 21.BAT

```
@ECHO␣OFF↵
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥WX 2¥WX 2.DEV↵
CD␣¥MYTALK↵
MYTALK↵
CD␣¥↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
ECHO␣ON↵
```

← 起動用バッチファイルはサブディレクトリの A:¥MYTALK に置いてください

WX 2.DEV は 101 ページを参照してください

日本語 FEP は WXII＋を設定してありますが、普段お使いの日本語 FEP を設定してください。

通信

WTERM

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
⬇
選択不可

⇧
自分で設定します。フリーソフトウェアに別配布の形でインストールプログラムがあります。これを利用すれば簡単にインストールすることができます。
この場合は選択できます

起動用バッチファイルはサブディレ➡クトリの
A:¥WTERM
に置いてください
WX 2.DEV
は 101 ページを参照してください



■ポイント

> 特に設定は必要ないので、汎用型で動く。EMS メモリが設定してあると、プログラムの一部が EMS メモリを使い動作が速くなる。別に用意されているインストールプログラムを使うと、ディレクトリの作成から、ファイルの転送にモデムの設定まで、簡単にセットアップできる。WTERM を使用するときは、このインストーラも併せてダウンロードして利用することをおすすめする

インストーラを使ってインストールすると、書き替えるを選んでも AUTOEXEC.BAT に PATH と環境変数の設定を追加するだけです。アンダーラインの部分を汎用型の AUTOEXEC.BAT に追加します。CONFIG.SYS は汎用型をそのまま使います。

```
PROMPT␣$P$G↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥WTERM;↵
SET␣WTERM=A:¥WTERM¥WTERM5A.DAT↵
SET␣TZ=JST-9↵
```

●起動用バッチファイル ……………………………………WT.BAT

```
@ECHO␣OFF↵
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥WX2¥WX2.DEV↵
CD␣¥WTERM↵
WTERM↵
CD␣¥↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

日本語 FEP は普段お使いのものを設定してください。

日本語FEP WXⅡ＋ Ver.2.7

■ポイント

WXⅡ＋はEMSとXMSに対応している。XMSはHMA領域に対応しているだけなので、MS－DOS Ver.5.0はHMA領域を「DOS＝HIGH」の指定でMS－DOSが使っているし、MS－DOS Ver.3.3ではHMA領域は使えないので、どちらの環境で使うにしても、EMSは「使用する」、HMAは「使用しない」と設定する。MS－DOS Ver.5.0で使用するときは、KKCFUNC.SYSの設定が必要。汎用型のCONFIG.SYSで問題なく使える。
WXⅡ＋は、各種の日本語FEPに置き替えて使えるという特異な面を持った日本語FEP。最新版のWXⅡ＋ Ver.2.7ではATOK 8に置き替えて使えるようになった。この機能のためにファイルの数はほかの日本語FEPの比ではない。ハードディスクにインストールすると、ディレクトリのなかには90ものファイルがある。少しでもハードディスクの容量を減らしたいと思ったら、不必要なファイルは削除すること。幸いにも分かりやすいファイル名がついているし、マニュアルにはすべてのファイルについてファイル内容が記載されている

AUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSの書き替え
↓
選択可

⇧
インストール時の環境設定でファイル名を指定することで選ぶことができます。

■インストール時に定義ファイルのできるディレクトリ

環境設定で指定できます

ADDDRVで組み込めるようにWX 2.DEVというファイル名を指定します。日本語WXⅡ＋の辞書とシステムファイルは
A:¥WX 2
にインストールします

●デバイス定義ファイル ……………………………WX 2.DEV

```
DEVICE=A:¥WX 2¥WXK.SYS␣/A 1↵
DEVICE=A:¥WX 2¥WX 2.SYS␣/INI=A:¥WX 2¥WX 2 SYS.INI␣/A 1↵
```

←デバイス定義ファイルはサブディレクトリの
A:¥WX 2
に置いてください



ファイル名をWX 2.DEV、スタイルはWX 2で作成してあります。

そして、定義ファイルにCONFIG.SYSを指定した場合は、ほかに日本語FEPが組み込まれていても、CONFIG.SYSのいちばん最後に追加して設定されてしまうので注意が必要です。

日本語 FEP のフルオートインストールは、この WXⅡ＋に限りませんが、インストールを終了したら CONFIG.SYS の記述内容の確認が必要です。日本語 FEP を組み込んだらアプリケーションソフトが起動しなくなったり、メモリ不足の表示がでるようになったら、日本語 FEP の二重登録をしていないか確認しましょう。

環境設定は WX 2 SET.EXE を起動することで変更できます。そのときに重要なのは、いくつかの日本語 FEP として使い分けるときは定義ファイルの名前も分かりやすい名前に変えることです。

ハードディスク内➡のサブディレクトリの¥WX 2 のなかに入っています

下記のファイルは、ATOK 8 の API を選択して作ったものです。定義ファイルも AT 8 の文字を入れてあります。

●ATOK 8 風定義ファイル ……………………………WX 2__AT 8.DEV



```
DEVICE＝B：¥WX 2¥WXK.SYS␣／A 1↵
DEVICE＝B：¥WX 2¥WX 2 A 8.SYS␣／INI＝A：¥
WX 2¥WX 2 SYS.INI␣／A 1↵
```

後ろについている／A 1 が EMS を使用するための起動オプションです。／A 2 なら HMA、／A 3 なら EMS と HMA の両方を使用するという指定のスイッチです。

日本語 FEP ATOK 8（一太郎 Ver.5 付属）

■ポイント

ATOK 8 だけを使うなら、EMS が設定してあれば汎用型の設定でも使用できる。一太郎 Ver.5 もともに使うのであれば、ジャストウィンド環境か、MEMORY SERVERII を使った環境が必要になる

■インストール時に CONFIG.SMP ができるディレクトリ

A:¥TARO 5

下のファイルがインストール時の CONFIG.SMP です。ATOK 8 用の設定を抜き出してデバイス定義ファイルを作ります。EMS 386 はメモリドライバなので不用です。ATOK 8 EX は DOSSHELL を使うときのためのドライバなので、DOSSHELL を使わなければ必要ありません。

```
FILES=30↵
BUFFERS=20↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥EMS 386.SYS↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
A:¥ATOK 8¥ATOK 8.UCF↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 EX.SYS↵
```

●デバイス定義ファイル ……………………………ATOK 8.DEV

```
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
A:¥ATOK 8¥ATOK 8.UCF↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↵
```

ATOK 8 を一太郎 Ver.4 で使えるようにするためには、UCF ファイルの部分を ATOK 7 用に変更します。これで ATOK 7 対応のアプリケーションソフトで ATOK 8 を ATOK 7 として使えます。

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
一太郎 Ver.5 付属の場合、ATOK 8 を単独でインストールすることはできませんが、CONFIG.SYS の書き替えは選べます。ATOK 8 の辞書とシステムファイルは、A:¥ATOK 8 にインストールします



← デバイス定義ファイルはサブディレクトリの A:¥ATOK 8 に置いてください



●ATOK 7 型デバイス定義ファイル………………ATOK 8__7.DEV

```
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
A:¥ATOK 8¥ATOK 7.UCF↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↵
```

Lotus 1-2-3 で使う場合は、マウスドライバも ADDDRV で組み込めるようにします。その場合、MS−DOS Ver.5.0 では、マウスドライバは DEVICEHIGH で UMB に組み込むようにします。MS−DOS Ver.3.3 の場合は DEVICE を使います。

●マウスつき ATOK 7 型デバイス定義ファイル
………………ATOK 8__7 M.DEV

```
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 A.SYS␣/UCF=
A:¥ATOK 8¥ATOK 7.UCF↵
DEVICE=A:¥ATOK 8¥ATOK 8 B.SYS↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥MOUSE.SYS↵
```

ATOK 6 として使うには、バッチファイルに 8 TO 6.COM を組み込んで使います。マウスを使うときは ATOK 8.DEV にマウスドライバの設定を追加しますが、その場合は ATOK 8 M.DEV のように名前を変えて、一太郎 Ver.5 を使うときには組み込まれないようにします。

●バッチファイルに 8 TO 6.COM を組み込んだ例

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥ATOK 8¥ATOK 8.DEV↵
A:¥JUST 5¥8 TO 6.COM↵
LOTUS↵
A:¥JUST 5¥8 TO 6.COM␣/R↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
```

日本語FEP ATOK 7

■ポイント

EMSに対応しているので、EMSメモリがあればメインメモリの消費を抑えられる。また、一太郎Ver.4付属のATOK 7は単独ではインストールできないが、ATOK 8のように圧縮されたファイルではないので、フロッピーディスクからコピーして使うこともできる

■参考にするAUTOEXEC.HDDとCONFIG.HDDがあるディレクトリ

保存用起動ディスク

参考にするCONFIG.HDDから、ATOK 7の設定を定義ファイルに抜き出します。

```
FILES=20↵
BUFFERS=10↵
DEVICE=ATOK 7 A.SYS␣/D=A:¥ATOK 7 L.
DIC␣/G=A:¥JSFONT¥JFGAIJ.UFO↵
DEVICE=ATOK 7 B.SYS↵
```

●デバイス定義ファイル ……………………………ATOK 7.DEV

```
DEVICE=A:¥ATOK 7¥ATOK 7 A.SYS␣/D=A:
¥ATOK 7¥A:¥ATOK 7 L.DIC␣/G=A:¥ATOK 7¥
A:¥JSFONT¥JFGAIJ.UFO↵
DEVICE=A:¥ATOK 7¥ATOK 7 B.SYS↵
```

ATOK 6しか使えないアプリケーションソフトにはATOK 7をATOK 6として使える7 TO 6.COMが用意されています。ATOK 8の8 TO 6.COMのバッチファイル（前ページ）を参考にして使ってください。

AUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSの書き替え
⬇
選択可

⇧
一太郎Ver.4付属の場合、ATOK 7を単独でインストールすることはできませんが、CONFIG.SYSの書き替えは選べます
ATOK 7の辞書とシステムファイルは、A:¥ATOK 7にインストールします

←デバイス定義ファイルはサブディレクトリのA:¥ATOK 7に置いてください



日本語 FEP

松茸 Ver 3

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
⬇
選択可

⇧
松茸を単独ではインストールできませんが、CONFIG.SYS の書き替えは選べます
松茸の辞書とシステムファイルは、
A : ¥MTTK 3
にインストールします

デバイス定義ファイルはサブディレクトリの
A : ¥MTTK 3 →
に置いてください

環境設定プログラム SETMTTK . EXE は、変更先のファイルが指定できないので、CONFIG.SYS に変更結果が → 書き込まれます。
あとから定義ファイルに読み込んで訂正をして、CONFIG.SYS からは削除することが必要になります

■ポイント

EMS と XMS に対応しているが、XMS は HMA 領域に対応しているだけなので、MS－DOS Ver.5.0 は HMA 領域を「DOS＝HIGH」の指定で MS－DOS がしようしているため、MS－DOS Ver.3.3 では HMA 領域は使えないので、どちらの環境で使うにしても、EMS は「使用する」、HMA は「使用しない」と設定する。圧縮ファイルにはなっていないので、フロッピーディスクからコピーして組み込むことができる

インストール時には CONFIG.SYS は作られないので、フロッピーディスクのシステム 1 から CONFIG.SYS を抜き出したのが下のファイルです。松茸の設定部分を ADDDRV で組み込めるように定義ファイルにします。

```
files␣=␣20↵
buffers␣=␣10↵
device␣=␣b : ¥mttk 3 a.drv␣a : ¥␣/n↵
device␣=␣b : ¥mttk 3 b.drv↵
device␣=␣b : ¥mcode.drv↵
```

●デバイス定義ファイル ……………………………MTTK 3.DEV

```
DEVICE＝A : ¥MTTK 3¥MTTK 3 A.DRV␣A : ¥MTTK 3␣/ZA : ¥MTTK 3␣/E ム␣/N↵
DEVICE＝A : ¥MTTK 3¥MTTK 3 B.DRV↵
DEVICE＝A : ¥MTTK 3¥MCODE.DRV↵
DEVICE＝A : ¥MTTK 3¥MBUSHU.DRV↵
```

SETMTTK.EXE を使うことによって環境設定をすることができます。EMS は「使用する」、XMS は「使用しない」と設定します。この定義ファイルは、環境設定プログラムを使って、コード表と部首引きを「使用する」に設定してあります。

日本語 FEP KATANA 4（Ninja 5 付属）

■ポイント

EMS と XMS に対応しているが、XMS は HMA 領域に対応しているだけなので、MS－DOS Ver.5.0 は HMA 領域を「DOS＝HIGH」の指定で DOS が使っているので、EMS は「使用する」、HMA は「使用しない」と設定する。
KATANA 4 は、MS－DOSVer.5 での使用では KKCFUNC.SYS の組み込みが必要。汎用型の設定で動く。
KATANA 4 は、MS－DOS Ver.3.3 と MS－DOS Ver.5.0 では使うプログラムが違うので、環境を変更するときはインストールし直す。デバイスドライバ名に「D 5」がついているのが MS－DOS Ver.5.0 用のファイル。インストール時に ADDDRV 用の定義ファイルを作るが、KATANA 4 が作る定義ファイルの拡張子 DVC は、ここでは DEV に統一する

●デバイス定義ファイル ……………………………KTN 4.DEV

```
DEVICE␣=␣A:¥KTN 4¥KTN 4 D 5.SYS␣/E/AS 32/AE 0/AX 0/AGN↵
DEVICE␣=␣A:¥KTN 4¥KTN 4 CD 5.SYS␣/E/H/DA:¥KTN 4¥KTN.DIC,A:¥KTN 4¥USR.DIC/I 111221/M 3111/J 11/C 5 CEDM/Z 22222221/O 11↵
```

KATANA 4 の環境設定は SETTEI.EXE を起動することで設定できます。

編集するファイル名は指定することができますので、デバイス定義ファイルを指定します。メモリの割りあての項目で XMS を選べるようになっていますが、EMS は「する」、XMS は「しない」を選びます。辞書バッファの設定のところの XMS メモリは設定してかまいません。ここの XMS は HMA のことではありません。

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
KATANA 4 のシステムディスク I に入っている K 4 SETUP を使うことによって、単独でもインストールできます。

NINJA 5、KATANA 4 のどちらのインストールでも ADDDRV 用のファイルを作ることができます

KATANA の辞書とシステムファイルは、A:¥KTN 4 にインストールします

デバイス定義ファイルはサブディレクトリの A:¥KTN 4 に置いてください



日本語 FEP KATANA 4（オーロラエース付属）

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択可

⇧
オーロラエースに付属の KATANA 4 は単独でインストールすることはできません

KATANA 4 の辞書とシステムファイルは、A : ¥KTN 4 にインストールします

デバイス定義ファイルはサブディレクトリの A : ¥KTN 4 に置いてください

必ず追加してください



■ポイント

EMS と XMS に対応しているが、環境設定用のプログラムが付属していないので変更はできない。デフォルトで EMS は「使用する」、HMA は「使用しない」と設定してある。KATANA 4 のサブセット版なので、MS−DOS Ver.5 対応のドライバがついていないので、組み込むときには KKCSAV.SYS の組み込みが必要になる。もちろん KKCFUNC.SYS も必要。KKCFUNC.SYS は CONFIG.SYS で組み込み、KKCSAV.SYS はデバイス定義ファイルで組み込む。
ADDDRV での使用を選べば定義ファイルを作るが、KATANA 4 が作る定義ファイルの拡張子は DVC なので、ここでは DEV に統一し、Ninja 5 の KATANA 4 と区別するために OA の文字を入れている

■デバイス定義ファイル……………………………KTN 4 OA.DEV

```
DEVICE␣=␣A : ¥DOS¥KKCSAV.SYS↵
DEVICE␣=␣A : ¥KTN 4¥KTN 4.SYS␣/F=A : ¥
KTN 4¥KTN 4.CFG↵
DEVICE␣=␣A : ¥KTN 4¥KTN 4 C.SYS␣/F=A :
¥KTN 4¥KTN 4.CFG/DA : ¥KTN 4¥KTNSMALL.
DIC,A : ¥KTN 4¥USR.DIC↵
```

サブセット版なので環境設定用のファイルはついてきませんが、KTN 4.CFG をエディタなどで書き替えれば環境設定をすることができますが、かなり高度な知識が必要になるのでやらないほうがいいでしょう。

日本語 FEP WXⅡ＋ Ver.2.5（WORKS 付属）

■ポイント

WXⅡ＋は EMS と XMS に対応しているが、XMS は HMA 領域に対応しているだけなので、MS－DOS Ver.5.0 は HMA 領域を「DOS＝HIGH」の指定で MS－DOS が使用しているため、MS－DOS Ver.3.3 では HMA 領域は使えないので、どちらの環境で使うにしても、EMS は「使用する」、HMA は「使用しない」と設定する。MS－DOS Ver.5.0 で使用するときは、KKCFUNC.SYS の設定が必要。汎用型の CONFIG.SYS で問題なく使える

■インストール時に CONFIG.WK 3 ができるディレクトリ

A：¥ ………………………………………ルートディレクトリ

インストール時にできる CONFIG.WK 3 は、既存の CONFIG.SYS に WX 2＋forMS の組み込みが追加されるだけです。WXⅡ＋の設定部分をデバイス定義ファイルにしますが、EMS と XMS の両方を使うように設定されているので、WXⅡ＋のディスク 1 に入っている WX 2 SET を起動して設定を変更します。WXⅡ＋Ver.2.7 と区別するために MS の文字を入れてあります。

●デバイス定義ファイル ……………………………WX 2 MS.DEV

```
DEVICE＝A：¥WORKS¥WXK.SYS␣／A 1↵
DEVICE ＝ A ： ¥ WORKS ¥ WX 2. SYS ␣ ／ DA ： ¥
WORKS¥WX 2.DIC␣／A 1↵
```

付属している WXⅡ＋は「WXⅡ＋Ver 2.5」のマイクロソフト向けの OEM です。最新版の WXⅡ＋Ver 2.7 をお持ちでしたらそちらを使用してもかまいません。

AUTOEXEC. BAT と CONFIG. SYS の書き替え
⬇
選択可

⇧ WORKS 付属の WXⅡ＋は単独でインストールすることはできませんが、組み込みは選択できます

WXⅡ＋の辞書とシステムファイルは、A：¥WORKS にインストールします



← デバイス定義ファイルはサブディレクトリの A：¥WORKS に置いてください

日本語 FEP NECAI かな漢字変換〔DOS 3 付属〕

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択不可

⇧
DOS 3 をインストールすると自動的に CONFIG.SYS に設定されます

■ポイント

EMS に対応しているので、EMS メモリが設定してあれば自動的に EMS に組み込まれる。もちろん汎用型の設定で動く。より多くの単語が登録された辞書は拡張セットに入っていて別売り

■デバイス定義ファイル ……………………………NECAI 33 D.DEV

```
DEVICE=A:¥DOS¥NECAIK 1.DRV↲
DEVICE=A:¥DOS¥NECAIK 2.DRV␣A:NECAI.
SYS↲
```

デバイス定義ファイルはサブディレクトリの「A:¥DOS」に置きます。

日本語 FEP NECAI かな漢字変換〔DOS 5 付属〕

AUTOEXEC.BAT と CONFIG.SYS の書き替え
↓
選択不可

⇧
DOS 5 をインストールすると自動的に CONFIG.SYS に設定されます



■ポイント

EMS に対応しているので、EMS メモリが設定してあれば自動的に EMS に組み込まれる。MS−DOS Ver.5.0 では、KKCFUNC.SYS を必ず組み込む必要がある。以前のものより変換はかなり賢くなっている。もちろん汎用型の設定で動く。より多くの単語が登録された辞書は拡張セットに入っていて別売り

■デバイス定義ファイル ……………………………NECAI 50 A.DEV

```
DEVICE=A:¥DOS¥NECAIK 1.DRV
DEVICE=A:¥DOS¥NECAIK 2.DRV␣A:NECAI.
SYS
```

デバイス定義ファイルはサブディレクトリの「A:¥DOS」に置きます。

CD－ROM

CD－ROMドライブの組み込み

■ポイント

最近では、CD－ROMドライブも一般的になってきたので、ここでCD－ROMドライブのデバイスドライバの組み込み方も解説しておこう。
CD－ROMドライブは、一般的にはSCSIインターフェースにハードディスクなどといっしょにつなげる。その際に重要なことは、SCSIのID番号の設定。通常だとSCSIボードが0番、ハードディスクが1番に設定されているから、そのつぎの2番に設定する。終端抵抗の設定も忘れずにおこなう。最近は内蔵しているものがほとんどなので、ディップスイッチで設定する。内蔵していない場合はコネクタに取り付ける

AUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSの書き替え
⬇
選択可

つぎはデバイスドライバの登録です。インストールプログラムが設定してくれるはずですから、簡単にできます。

CONFIG.SYSは、いちばん後ろにつぎの記述を追加します。

```
DEVICEHIGH＝A：¥DOS¥NECCD.SYS␣／D：CD
__101↲
LASTDRIVE＝Q↲
```

AUTOEXEC.BATは、1行めにつぎの記述を追加します。

```
A：¥DOS¥MSCDEX.EXE␣／D：CD__101␣／L：Q↲
```

「D：CD__101」の部分は必ず同じに書きます。LASTDRIVE＝Qと／L：QでCD－ROMドライブはQドライブとして設定されます。「NECCD.SYS」の部分は、それぞれの各社のデバイスドライバ名になります。

各社のデバイスドライバ名をNECCD.SYSにリネームして使う方法もあります。

←海外製のWindowsソフトは、ハードディスクをCドライブ、CD－ROMをQドライブに設定したインストールプログラムしかついていないのもありますので注意が必要です

本谷裕二（ほんやゆうじ）
1952年　姫路市生まれ
神奈川大学経済学部卒

仕事場では、パソコンに電源を入れたままで4台使いまくり、ミニコンを1台DTPのプロ仕様としてギンギンに動かし、自宅でも事務所と同じ環境でミニコン1台、パソコン4台を個人所有。これ以上の公私ともにコンピュータ環境がないというぐらい、パソコン・ミニコンの小憎らしい使い方に熟知している超実践派。
理論より実践的・現場的活用を重視し、即ビジネス面や私生活でパソコンを扱うためのノウハウを蓄積しつつ、パソコン情報を提供しつづけている。
最近では2年半前よりパソコン通信のぱじゃまNETを開局し、パソコンへの疑問や悩みを直接一般ユーザーから収集。より身近な現場の悩みを収集把握し、解決に対応している。
著書に

「これでやっと使えるぞ！！　ハードディスク」オーエス出版社
「これでやっと使えるぞ！！　日本語FEP」オーエス出版社
「これでやっと使えるぞ！！　バッチファイル」オーエス出版社
「これでやっと使えるぞ！！　WINDOWS」オーエス出版社
がある

出版社　株式会社イデア　代表取締役
編集プロダクション　株式会社チェスター　代表取締役
パソコン通信ホスト局　ぱじゃまNET株式会社　代表取締役

これでやっと使えるぞ！！　CONFIG.SYS&AUTOEXEC.BAT

1994年7月15日　第1刷発行
1995年4月20日　第12刷発行

著　者———本谷裕二
発行者———前嶋　孟
発行所———オーエス出版株式会社
〒101　東京都千代田区神田錦町3－14　神田NSビル3F
TEL　03（3295）1658　振替　00110－3－29178
印刷———壮光舎
製本———共栄社

ISBN 4－87190－663－9　C0055

OTASUKE MEMO

アプリケーション切り替え用５つのファイル

汎用型 AUTOEXEC.BAT ……………………………………MS－DOS 5.0 A 用

```
@ECHO␣OFF↵
PATH␣A:¥;A:¥DOS;A:¥JSW;A:¥TARO 4;A:¥JSFONT;
A:¥JSUT;A:¥LOTUS;A:¥WORKS;A:¥NINJA 5;A:¥
WTERM;↵
PROMPT␣$P$G↵
SET␣WTERM=A:¥WTERM¥WTERM 5 A.DAT↵
SET␣TZ=JST-9↵
SET␣TEMP=A:¥DOS↵
SET␣DOSDIR=A:¥DOS↵
A:¥MENU.BAT
```

汎用型 CONFIG.SYS ……………………………………MS－DOS 5.0 A 用

```
BUFFERS=20↵
FILES=30↵
SHELL=A:¥COMMAND.COM␣A:¥␣/P␣/E:1024↵
DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS↵
DEVICE=A:¥DOS¥EMM 386.EXE␣/P=128␣/UMB↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥SMARTDRV.SYS␣2048␣128↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥RAMDISK.SYS␣1536↵
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥KKCFUNC.SYS↵
DOS=HIGH,UMB↵
```

TARO 4.BAT ………………アプリケーション(一太郎 4)起動用バッチファイル例

```
A:¥DOS¥ADDDRV␣A:¥ATOK 7¥ATOK 7.DEV↵
CD␣¥JSW↵
JXW↵
CD␣¥↵
A:¥DOS¥DELDRV↵
A:¥MENU.BAT↵
```

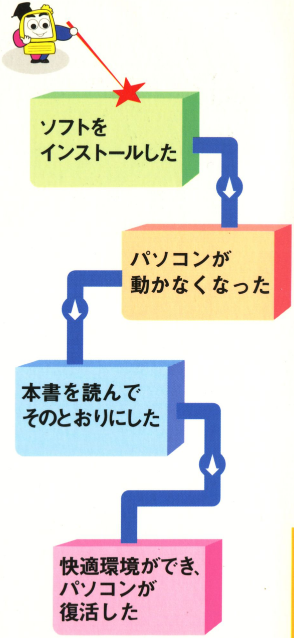
ATOK 7.DEV ……………………………………………………デバイス定義ファイル

```
DEVICE=A:¥ATOK 7¥ATOK 7 A.SYS␣/D=A:¥ATOK 7¥A:¥
ATOK 7 L.DIC␣/G=A:¥ATOK 7¥A:¥JSFONT¥JFGAIJ.UFO↵
DEVICE=A:¥ATOK 7¥ATOK 7 B.SYS↵
```

アプリケーション切り替え用5つのファイル

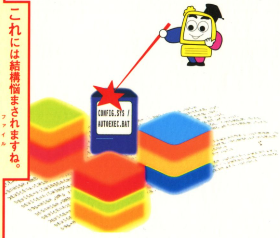
MENU.BAT ……………………MS－DOS 5.0 A＆MS－DOS 3.3 D 共用型メニュー

```
ECHO␣OFF↵
:START↵
CLS↵
ECHO␣**************** **********↵
ECHO␣*␣␣␣␣␣␣␣␣//MENU// ␣␣␣␣␣␣␣␣*↵
ECHO␣*␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣ ␣␣␣␣␣␣␣␣*↵
ECHO␣*␣␣1. 一太郎 Ver 4␣␣␣␣␣␣␣ ␣6. 松␣␣␣␣*↵
ECHO␣*␣␣2. Lotus 123␣␣␣␣␣␣␣ ␣7. オーロラ␣*↵
ECHO␣*␣␣3. Works 3.1␣␣␣␣␣␣␣ ␣8. まいとーく␣*↵
ECHO␣*␣␣4. NINJA 5␣␣␣␣␣␣␣␣␣9. MENU␣␣*↵
ECHO␣*␣␣5. WTERM␣␣␣␣␣␣␣␣␣0. 終␣␣了␣␣*↵
ECHO␣*␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣ ␣␣␣␣␣␣␣␣*↵
ECHO␣**************** **********↵
ECHO␣OFF↵
A:¥DOS¥BATKEY␣0␣数字を選んでください。↵
IF␣ERRORLEVEL␣9␣GOTO␣9↵
IF␣ERRORLEVEL␣8␣GOTO␣8↵
IF␣ERRORLEVEL␣7␣GOTO␣7↵
IF␣ERRORLEVEL␣6␣GOTO␣6↵
IF␣ERRORLEVEL␣5␣GOTO␣5↵
IF␣ERRORLEVEL␣4␣GOTO␣4↵
IF␣ERRORLEVEL␣3␣GOTO␣3↵
IF␣ERRORLEVEL␣2␣GOTO␣2↵
IF␣ERRORLEVEL␣1␣GOTO␣1↵
IF␣ERRORLEVEL␣0␣GOTO␣0↵
:1↵
A:¥JSW¥TARO 4.BAT↵
:2↵
A:¥LOTUS¥123.BAT↵
:3↵
A:¥WORKS¥WK 31.BAT↵
:4↵
A:¥NINJA 5¥NJ 5.BAT↵
:5↵
A:¥WTERM¥WT.BAT↵
:6↵
A:¥MATUV 6¥MATU 6.BAT␣
:7↵
A:¥AKPRO¥AKPRO.BAT↵
:8↵
A:¥MYTALK¥MYTALK 21.BAT↵
:9↵
A:¥MENU.BAT↵
:0↵
CLS↵
CD␣¥↵
```


ソフトを
インストールした
パソコンが
動かなくなった
本書を読んで
そのとおりにした
快適環境ができ、
パソコンが
復活した

ISBN4-87190-663-9 C0055 P980E
定価980円（本体951円・税29円）

これには結構悩まされますね。
でも、この二つの呪文（ファイル）を使いきらずに
DOSパソコンを使うことはできません。



はじめてわかった… こんなに簡単だったのか!!

CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATのポイント解説